

話題転換研究の概観—タイプと方略を中心に

楊 虹

詳細目次

1. はじめに
 - 1.1. 目的
 - 1.2. 用語の定義
 - 1.2.1. 「話題」とは
 - 1.2.2. 話題「転換」とは
2. 話題転換の二つの捉え方と本稿の立場
 - 2.1. 話題転換の二つの捉え方—流れるような話題転換と境界付けられた話題転換
 - 2.1.1. 流れるような話題転換
 - 2.1.2. 境界付けられた話題転換
 - 2.2. 本稿の立場と構成
3. 母語場面での話題転換研究
 - 3.1. 話題転換のタイプ
 - 3.1.1. 導入された話題と会話の流れとの関連性に注目した分類
 - 3.1.1.1. 分類の枠組み
 - 3.1.1.2. 会話の流れとの関連性に注目した分類の枠組みを指標に分析した研究
 - 3.1.2. 会話の参加者の相互行為の特徴に注目した分類
 - 3.1.2.1. 分類の枠組み
 - 3.1.2.2. 相互行為に注目した分類の枠組みを指標に分析した研究
 - 3.2. 話題転換方略に関する研究
 - 3.2.1. どのような話題転換方略があるか
 - 3.2.1.1. 言語・非言語要素に注目する研究
 - 3.2.1.2. 相互行為に注目する研究
 - 3.2.2. 話題転換方略の使用に影響を与えるもの
 - 3.2.2.1. 話題転換のタイプによる影響
 - 3.2.2.1.1. 会話参加者の関係及び会話の場面による影響
4. 話題転換の対照研究
 - 4.1. 話題転換のタイプの対照研究
 - 4.2. 話題転換方略の対照研究

5. 接触場面における話題転換研究

5.1. 話題転換のタイプ

5.2. 話題転換方略

5.2.1. 日本語学習者に焦点を当てる研究

5.2.2. 日本語母語話者に焦点を当てる研究

5.3. まとめ

6. 終わりに

稿末注

参考文献

話題転換研究の概観

—タイプと方略を中心に—

楊 虹

要 旨

本稿は話題転換の研究を概観することにより、これまでの話題転換研究の知見を整理し、日本語教育における話題転換研究の今後の課題を見出すことを目的とする。そのために、まず、話題転換研究を 1. 転換のタイプ—どのような話題転換が見られるか、2. 転換の方略—人々はどうのように話題転換を行うか、の 2 点を中心に、母語場面の研究を概観する。次に、異なる母語場面での話題転換を比較する対照研究を概観する。最後に、話題転換の母語場面の研究及び対照研究で得られた知見を踏まえ、日本語母語話者と日本語学習者が参加する接触場面の話題転換研究を概観し、その問題点を指摘し、日本語教育や異文化間コミュニケーションへの提言を行う。分析の対象は、話題を談話レベルで扱い、二人以上の参加者による対面会話を分析資料に用いる文献に限定する。

【キーワード】 話題転換のタイプ、 話題転換方略、 関連性、 相互行為、 接触場面

1. はじめに

1.1 目的

仲間や友人などとの会話が弾むとき、時間が早く過ぎると誰もが感じる。逆に、会話が弾まないときは、場を持たせるために無理に話題を出すこともよくある。会話が続き限り、私たちは常に意識的、または無意識的に話題の展開・転換をくり返している。しかし、スムーズに次の話題を導入することは、日本語学習者にとって決して容易なことではない。畠(1988)は早くから話題の転換を含む日本語学習者の会話ストラテジー¹教育の必要性を指摘している。そして、近年ようやく日本語学習者の話題転換方略を取り上げる研究がいくつか見られてきた(木暮 2002; Nakai 2002 他)。

話題転換方略の使用は、導入された話題と先行話題との関連性や、会話の場面、参加者間の人間関係等様々な要素の影響を受ける(村上・熊取谷 1995; Jones 2004)。なかでも、先行話題との関連性は、どのような場面の会話でも、転換の方略の使用を左右する重要な要素であると思われる。話題転換の方略を正確に把握するには、導入された話題と先行話題の関連性等を合わせて分析する必要があることが示唆されている。日本語母語場面及び日英対照研究では、話題間の関連性の特徴から話題転換のタイプを分類し、それが話題転換の方略の使用にどう

影響するかについての研究が見られる(村上・熊取谷 1995; 山本 2003)。しかし、日本語学習者の話題転換方略に関する研究(木暮 2002; Nakai 2002)では、これらの要素にはほとんど触れず、言語表現のみに注目している。そこで、本稿は、転換のタイプと方略を二本の柱にし、まず母語場面对照研究の話題転換研究をレビューし、これらの知見を踏まえた上で、次に接触場面の研究を検討し、日本語教育における話題転換研究の今後の方向を考える。

1.2 用語の定義

1.2.1 「話題」とは

日常的に何気なく使われている「話題」は談話分析の分野で異なる用語と定義がなされている。英語では、一般に文の主題を表す topic と区別するため、discourse topic を用いることが多い。日本語の話題に関する研究には、「話題」、「テーマ」、「トピック」と 3 種類の用語が用いられている(南 1981; メイナード 1993; 村上・熊取谷 1995 他)。本稿では以下よりこれら三つの用語を「話題」と統一して表記する。

談話分析の分野で話題の定義はまちまちであるが、大きく分けて三つのタイプがある。一つは Keenan & Schieffelin(1976)に代表される命題説である。話題とは話し手の新しい情報提供・要求に関する命題(命題のセット)と定義されている。メイナード

ド(1993)も同じくこの命題説を唱えるものである。これらの立場を取る研究は主に新情報・旧情報という観点から単一の発話を分析単位としている。

そして、より多くの研究者は話題を「ある談話(会話)で話される内容」と定義する。話題は会話の構造に関わり、会話を構成する単位的な部分として捉えられている。このような捉え方をとする研究の主な関心事は、会話、特に一見とりとめのない日常会話がどのように構成されているのかにある。談話(会話)における話題を文章の「段落」に相当するものとして捉え、ある談話を話題ごとに分けて分析することによって、その談話のアウトラインを明らかにすることができる(南 1981; 村上・熊取谷 1995)。そして、話題には階層があり、すなわち類似する複数の話題が集まってより大きな話題を形成するという捉え方が一般的である。

これについて、Brown & Yule(1983)は話題という概念は直感的にある談話の塊が何についてか、次の塊は何についてかを統一の原則で表現する有効な手段であるものの、実際にはそれぞれの話し手が別々の話題について話している「話し手の話題」も見られると指摘している。彼らはある談話の塊につけられる「話題」はその談話に付けられる複数の選択肢のひとつに過ぎず、むしろ「話題の枠組み」という概念で捉えるべきだという。

本稿は話題転換の研究を概観する目的から、話題そのものの定義についてこれ以上深入りすることは控えるが、基本的に、話題は会話の参加者のやり取りを通して作りあげられるものであるという前提の下、談話の参加者たちが同じ事柄をめぐる話を展開していると考え、話題とは「ある談話の塊で言及された事柄である」と定義する。

1.2.2 話題「転換」とは

前節の「話題」と同様に話題転換の用語と範囲規定も研究者によって異なる。英語で書かれた研究では“change”、“shift”、“transition”という三つの用語が話題転換という意味で使われている。まず、topic change と topic shift を区別する研究(Gardner 1987; Maynard 1980)があり、これらの研究は話題の導入発話が前の発話との間に関連性が見られるか否かを判断の手がかりとしている。関連性が見られるのは topic shift で、見られないのは topic change とされている。次に、topic change または topic shift の意味範囲を広く捉え、そのうちの一つの用語で転換全般を

カバーするような捉え方をとする研究(Covelli & Murray 1980; Crow 1983; Planalp & Tracy 1980; Stech 1982)があり、いずれも用語を明確に定義しておらず、また Crow(1983)のように論文の中で topic change と topic shift が混在している研究もある。また、上記の他、topic transition を使う研究(Ainsworth-vaughn 1992; Jefferson 1984; Okamoto & Smith-Lovin 2001; West & Garcia 1988 他)も見られるが、いずれもはっきりとした定義はなされていない。

日本語では、話題の「転換」、「移行」、「推移」といった言葉が見られるが、転換が比較的に一般的であるため、本稿では「話題転換」という用語を用いる。そして、話題転換とは、それまでの会話内容の焦点から外れた発話をした場合またはそのような発話行為であると定義する。話題転換の範囲は、先行発話と全く関連しないものから、ある程度関連を持つものまで含む。本稿は、英語で書かれた文献で、話題転換全般について論じる場合に用いられる用語は、「転換」と表記するが、その下位分類の一つを指す場合は、日本語に訳し²、括弧で英語の表記をつける。日本語の文献は原文で使われる用語をそのまま用いる。

2. 話題転換の二つの捉え方と本稿の立場

2.1 話題転換の二つの捉え方—流れるような話題転換と境界付けられた話題転換

「流れるような話題転換 (stepwise topic movement)」、「境界づけられた話題転換 (boundaried topical movement)」という Sacks の話題転換の二つの形への指摘がその後の話題転換研究の出発点になっている(Atkinson & Heritage 1984: 165)と言われている。

2.1.1 流れるような話題転換

流れるような話題転換を話題転換の本質と考える立場に立つ研究は、会話の流れや、会話の参加者がいかに相互行為をしているかという実態解明に努める。

流れるような話題転換に注目する研究は話題性がスムーズに生み出される手続きに焦点を当てている。Sacks(1992)は「話題上一貫して話す」(Talking Topically)とはどういうことかを細かく分析し、後の研究に多大なヒントを与えている。話し手が話題上一貫して話すことができるのは co-class membership というテクニックを使っているからだ

と Sacks(1992)は分析している。つまり、次の話し手が現在の話に言及される事柄のあるクラス(class)に属される一つの具体的な事柄として捉え、そのクラスに属されるほかの事柄を示してそれを話題にすることで、一貫性を保ちながら、気付かれないうちに話題が次々と転換していくことが可能になるわけである。

Sacks の co-class membership という概念をより具体性をもたせて発展させたのは、Adato(1980)の「共に知られる性格(known-in-common character, 串田訳)」である。そして、串田(1997)は上の Sacks(1992)と Adato(1980)の議論に賛同しながら、そのあいまい性を指摘、日本語の会話を分析し、「共一選択」(co-selection)という概念をより具体的に提示した。串田はスムーズな推移も、唐突な推移も、いずれも会話の参加者が話題の「共に知られた性格」を基に手続き化していると指摘している。ただし、串田は同時にこの「共に知られた性格」は言い換えれば、時間・空間の共有感覚であるため、「感覚の齟齬」が潜在的には常に存在すると述べている。串田(1997)の議論はおしゃべりという特定の目的のない会話場面では当てはまるが、Schegloff & Sacks(1973: 302)が指摘したように、「個々の言いたいことが、すべての会話過程において自然に会話にのぼる機会を与えられるとの保証はなにもない」ので、現在の話題に境界をつけてから次の話題を開始する手法もよく見られる。それが次節で述べる境界付けられた話題転換という捉え方である。

2.1.2 境界付けられた話題転換

「境界付けられた話題転換」という立場での研究は、主に隣接する二つの話題間の関連性はどのようなものか、また会話の参加者がどのように次の話題を確立させるのか、という2点に関心を持つ。

この立場を取る研究は、話題が単位性を持ち、会話の内容分析を行うことにより隣接する二つの話題間の関連性を明らかにすることができると考えている。そして話題転換の分析を行うことにより会話の全体の構造が分かると主張する(Gardner 1987)。また、ある会話に導入された話題がそれまでの会話とどのような内容的なつながりがあるのか、会話の参加者がどのように話題間の境界を示しあうか、具体的にどのような境界マーカがあるか、といったことに関心を持つ。話題転換研究に見られるこれらの関心は、主に二つの研究の柱を形成している。一

つは話題転換のタイプを分類する試み(南 1981; 村上・熊取谷 1995; Brinton & Fujiki 1984; Crow 1983; Gardner 1987; Korolija & Linell 1996; West & Garcia 1988; Yabuuchi 2002 他)で、もう一つは話題転換の役目を果たすと思われる言語・非言語要素を提示する試み(村上・熊取谷 1995; メイナード 1993; Crow 1983; Goodenough & Weiner 1978; Reichman 1978 他)である。前者の場合、さらに分類したタイプを分析指標に用いて、会話参加者のコミュニケーションの特徴や会話参加者の社会文化的要因の会話に与える影響を見出そうとする研究も見られる。

2.2 本稿の立場と構成

本稿は日本語教育という立場で、学習者の話題転換方略を含む談話ストラテジー教育に示唆を与えることを目指している。接触場面では、学習者の話題転換の問題のありかはそのどのように先行話題をスムーズに終わらせ、次の話題を導入するかにある。すなわち話題転換の際、スムーズに話題間の境界づけをすることができないことである。そこで、本稿は、学習者の問題を考える際、より多くのヒントが得られると思われる境界付けられた話題という立場に立つ研究をレビューの対象とする。レビューの範囲は、2人もしくはそれ以上が参加する対面の会話³を扱った研究に限定する。本稿では、会話を特定の目的のない日常会話や、実験目的で設定される会話場面から、会議や、討論場面まで、幅広く捉えるが、その際、会話の目的が話題転換に与える影響も十分考慮した上で議論を進める。

一般的に、接触場面の研究、特に談話分野の研究は母語場面や対照研究で得られる知見を踏まえて行われる必要があると考えられる。しかし、話題転換研究において、母語場面での研究で得られている多くの知見が必ずしも対照研究や接触場面に反映されているとは言えない現状にある。それが結果的に1章の目的で指摘した接触場面の研究の偏りにつながっていると考えられる。本稿は「境界付けられた話題転換」という立場で、3章で、まず母語場面での話題転換研究を概観し、次に4章で、現時点でみられる対照研究を取り上げ、母語場面の研究で得られた知見がどれくらい反映されているか、また新たにどのような知見が得られ、さらにこれからはどのような研究が必要か、について考える。そして、最後に5章で接触場面の研究を検討する。接触場面の話題転換研究は母語場面の知見を一部取り入れるものが見

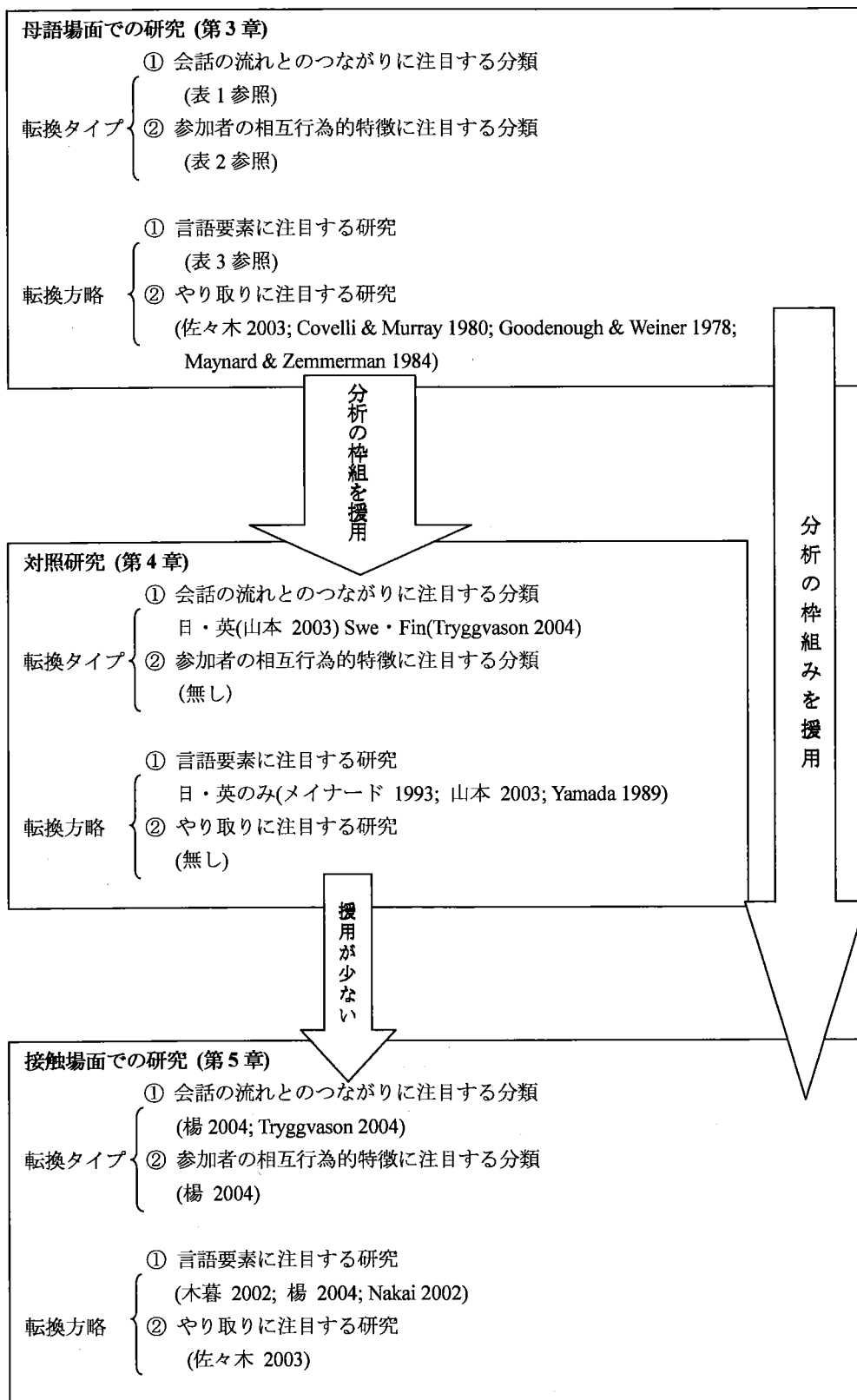


図1 3章～5章の流れ

られたが、全体的に少ない。その原因を考える際、対照研究の数の少なさ、対照研究の知見を接触場面に取り入れる研究が少ないことが指摘できると考える。図1は3章から5章までの流れを表す。なお、各章はそれぞれ 1. 話題転換のタイプ、2. 話題転換の方略の順で進めていく。

3. 母語場面での話題転換研究

私たちが話題転換に注目した時、まず考えるのは、新しく導入された話題の内容がそれまでの会話の流れとどのようなつながりを持つかであろう。筆者が収集した日本語母語話者同士のデータから次の二つの会話例を見てみよう。

会話例 1

- 1A え、でもちょっと嬉しいね。鶴瓶に。
2B 鶴瓶に突っ込まれて。(笑)
(二人笑)
3A へー、そうなんだ。
4B そう。
→5A え、生活生文?
6B 生文、うん。

会話例 2

- 1B だから、波が次はうちの2年生。
2A えー。
3B なんかも今の3年は優秀らしいよって言ったからたぶんうちは波とか、たぶんだめ。
4A え、そんなことないよ。分からないけど。
5B うわさでは。
→6A 生社¹って何人ぐらい。
7B 講座は30。
8A じゃあ、〇〇知っている?

この二つの会話例では、→で示したターン⁶から、話題が変わったことが分かる。会話例1では、話題は学園祭にタレントの鶴瓶が来たという話からBの所属の話へと転換され、新しい話題は前の話とほとんどつながりを持たないと判断されるだろう。一方、会話例2では、話題はBの所属学部でのうわさからその学部での共通の知り合いへと転換され、新しい話題は前の話から引き出されたもので、二つの話題間につながりがあると判断されるだろう。

以上のように、導入される話題の内容を分析し、

それまでの会話との内容的なつながりから、話題転換のタイプを分類する研究が見られる(南 1981; 村上・熊取谷 1995; Brinton & Fujiki 1984; Crow 1983; Gardner 1987 他)。例えば、上記二つの会話例は村上・熊取谷(1995)の分類によれば、それぞれ新出型転換(後続話題は初めて会話に上った事柄)と派生型転換(後続話題は前の話題・発話から引き出された事柄)に分類されよう。

一方、導入される話題の内容にではなく、話題が転換される際に会話の参加者たちがどのようなことをしているか、その相互行為に注目する分類もある。会話例1では二人が笑ったり、相互に相づちでターンを譲り合ったりした後に、新しい話題が導入された。このように、話題が終了に差し掛かったときに、笑ったりして、お互いに相づち以外の実質発話をせずに協働で話題を収束させるプロセスが見られる話題転換は、「協働的転換」(West & Garcia 1988; Collaborative Topic Transition)と分類される。逆に会話例2のように終了プロセスが見られない話題転換は、「一方的転換」(West & Garcia 1988; Unilateral Topic Transitions)と分類される。

このように、どのような話題転換であるかを考える際、談話分析の分野では、上記のような話題転換の異なる側面に着目して分類する二つの流れがある。3.1 では、この二つの視点に立った分類の枠組み及びこれらの分類の枠組みによってえられた知見を詳しく述べる。

話題転換において、もう一つの注目点は、会話の参加者が「次のことは前に述べたこととさほど関係がない」ということをどのように示し、また何を手がかりに認識しているのかについてである。会話例1では、「え」という「感動詞」が見られた。この「え」は自らの発話の内容が先行発話との関連性が低い、または直接の関連がないことを聞き手に示し、聞き手の注意を喚起する役割を果たす(田窪・金水 1997)。会話例1では「え」に続いて、質問で次の話題が導入された。このような話題を転換する役目を果たす言語表現や非言語行動を話題転換方略と言う。3.2 ではこの転換方略に注目し、これまでの研究でどのような転換方略が見られるか、どのような知見が得られたかを見ていく。

3.1 話題転換のタイプ

話題転換のタイプに言及した研究には、分類の枠組みの提示に止まるものもあれば(Gardner 1987)、

実際の会話データを使って枠組みを検証するもの(Yabuuchi 2002)もある。前に少し触れたように、これらの研究を分析の視点から見ると、大きく二つに分けられる。一つは会話の内容分析という視点、すなわち話題と会話の内容や、会話の場とのつながりという視点からの分類である(南 1981; 村上・熊取谷 1995; Brinton & Fujiki 1984; Crow 1983; Gardner 1987; Korolija & Linell 1996 他)。もう一つは話題転換のプロセスにおける会話参加者の相互行為という視点、すなわち話題転換において参加者たちがお互い何をしたかまたはしなかったかに注目した分類である(村上・熊取谷 1995; Ainsworth-Vaughn 1992; Okamoto & Smith-Lovin 2001; West&Garcia 1988 他)。本節では、この二つの視点から話題転換のタイプの研究を 1.どのような転換タイプがあるか、2.それぞれの分類はどういう目的の分析に有効で、談話研究にどのような貢献ができるかを中心に論じる。

3.1.1 導入された話題と会話の流れとの関連性に注目した分類

3.1.1.1 分類の枠組み

内容上のつながりの判断には主に二つの方法、すなわち、隣接する二つの発話間の結束性という局部での判断と、いわゆる母語話者の直観で感じられる談話範囲内の一貫性というより広範にわたる判断が用いられる(Gardner 1987)。ただし、Gardner(1987)が指摘している広範にわたる判断は会話内容そのものとのつながりに限る。一方、会話の内容のみならず、会話の場や、活動など会話のコンテキストとの関連性を取り入れた分類も見られる(Korolija & Linell 1996; Plannalp & Tracy 1980)。ここでは 1)会話の内容との関連性のみからの分類、2)会話の内容及び広範なコンテキストとの関連性に注目した分類、の順で概観する。

1) 導入された話題の内容と会話の内容との関連性からの分類

まず、話題転換のタイプを大きく三つに分類できるところは共通して見られる(南 1981⁶; 村上・熊取谷 1995; Brinton & Fujiki 1984)(表 1 参照)。下記の定義は村上・熊取谷(1995: 103-104)による。

派生型：先行トピックで言及された事象からトピックが選ばれ、これが導入される場合である。

再生型⁷：隣接トピックの間では一見新出型に見えるつながりが、実はそれ以前のトピックで語られた内容が再度後続トピックとし

て導入される場合を言う。

新出型：先行トピックの中で全く言及されていないことが後続トピックになる場合である。

一方、話題転換のタイプを上記 3 タイプからより細かく分類する研究も見られる(Gardner 1987; Yabuuchi 2002)。Gardner(1987)は会話の構造に関わる話題の定義と役割を論じた論文で、話題転換を通して、会話のアウトラインを示すことを目的としており、村上・熊取谷(1995)の派生型と再生型に相当する部分をより細かく分類している。

派生型：

- ① 先行話題が終了に向かう際、その中で言及されているある側面だけを拾って話題にする
- ② topic shading、先行話題の言及される範囲を広げてそれを話題にする
- ③ topic fading、先行話題に言及しつつ異なる話題を導入する。

再生型：

- ① 循環：現在の話題のどの発話交換にもリンクしないが、派生で転換された前の話題の発話交換にリンクする
- ② 再導入：現在の話題にはリンクしないが、前の話題(現在の話題との間に派生関係を持たない)にリンクする

循環と再導入の区別は派生の後の導入か、完全に変えられた後の導入かである。しかし、この分類では、文レベル(Between sentence topics within a discourse unit)のものと、談話ユニットレベル(Between discourse units)のものが混在しているため、派生と循環の定義があいまいであると指摘されている(Yabuuchi 2002: 236)。また、具体的な会話例を用いた分類の検証もされていない。

一方、Yabuuchi(2002)はメモリーの中での連想(association in memory)という観点から、話題転換のタイプを分類した。私たちは相手の発話を聞く際、脳の中でさまざまなメモリーが活性化されている。これらのメモリーをベースに次の話題/発話を決める。メモリーの活性化の決め手は、言語能力のほかに、論理的な関連性の構造を持ち、社会的に受け入れられる方法でコミュニケーションする能力も含む。連想には説明的連想と自由連想という 2 種類の連想があり、説明的連想は参加者間の知識・情報のギャップを埋める。それに対し、自由連想は現在の話題との関連性が薄く、メタファー的な連想や、ポライトネス

表 1 導入された話題と会話の流れとの関連性に注目した分類

研究	タイプの分類							
	連続(発展)		断絶					
南(1981)	連続(発展)		再出		新出			
Brinton & Fujiki(1984)			変更(Topic Change)					
村上・熊取谷(1995)	派生 (Topic Shading)		再出		新出			
Gardner(1987)	派生型		再生型		新出型			
Yabuuchi (2002)	派生 (3つの下位分類)		再出		偶然の新出			
	論理的派生	偶然的派生	論理的派生の循環	偶然的派生の循環				
Plannalp & Tracy(1980)	派生		再出		環境型	不特定		
Korolija & Linell(1996)	派生関連 (2つの下位分類)		再出		状況関連			
					突発的出来事に関連	その場にいる人に関連	抽象的な活動タイプ関連	共通知識等状況許容範囲内

やマクロのテキストからの連想⁸であるという。この2種の連想から彼は派生型と再生型を「論理的」と「偶然的」に下位分類した。

Yabuuchi(2002)の連想に関する二つのタイプの説明は十分に納得のできるものであるが、論理的派生の循環と偶然的派生の循環に関しての説明が少なく、今まで再出と分類されたものがこの二つの下位分類に収まるかは疑問⁹である。また彼が実際に週刊誌の対談をデータに分析した結果、論理的派生の循環と偶然的派生の循環が見られなかったので、具体的にどういった転換かイメージしにくい。

2) 導入された話題と会話の内容及び広範なコンテキストとの関連性に注目した分類

Gardner(1987)や Yabuuchi(2002)等の研究は人間の認知面の視点からさらに細かい分類を試みた研究で、基本的には導入された話題とそれまでの会話の内容との関連性のみを分析基準にしている。本節は、会話の内容だけではなく、会話の行われた物理的な環境や会話の参加者の背景知識、活動の場面などを含む会話のコンテキストとの関連性も取り入れたアプローチを紹介する。このアプローチはそれまで新出型と一括りにされたものの再分類を試みたという共通点が見られるが、会話のコンテキストをどのように捉えるかは研究によって異なる。

Plannalp & Tracy(1980)は会話の物理的環境を分

類に入れている。まずは会話内容との関連性で分け(Conversation/Nonconversation)、次にアクセスのしやすさからさらにそれぞれを二つに分ける。会話に関連するものは 1.直前の話題に関連するか(派生型)、2.より前の会話に関連するか(再出型)に分ける。会話に関連しないもの(新出型転換と分類されていたものは 3.環境型(Environmental、環境に関連するもの)、4.不特定¹⁰(Unspecified)に分類される。

一方、Korolija & Linell(1996)は「派生」と「新出」をより細かく分類している。Korolija & Linell(1996)は話題の軌跡または共通の活動により結束され、境界づけられている談話の塊をエピソードとしているが、この概念は本稿の話題とほぼ一致している。会話の参加者は、聞き手が容易にアクセスできるように、コンテキストと関連する事柄をリソースとして用いて話題を導入する。このコンテキストは会話の内容、環境、参加者の背景知識など極めて広範にわたる。Korolija & Linell(1996)は、これらのリソースを明らかにする有効なコーディングシステムとして TEA(topic episode analysis)を提示している。TEA では、話題転換は4大種類、8つのタイプに分類される。

1.派生関連(locally)co-textually anchored initiations

- ① 先行話題のある部分を次の話題のリソースにする (Recontextualization of an element from the prior episode)

②先行話題のコンテキストの類似¹¹

(Episode analogous to prior episode)

2.再出(Reintitiation(renewal)of, or return to a prior, nonadjacent topic in the same discourse)

3.状況関連新出(situationally evoked initiations)

①突発的なでき事¹²(Reference to an event taking place in the situation)

②その場にあるもの、人に関連(Reference to an object present in the situation)

③抽象的活動タイプ(Reference to (some aspect of)the abstract activity type)

④共通知識など状況許容範囲内(Invoking other topics that are situationally near at hand(belonging to situationally activated background assumptions))

4.脈絡のない新出(Contextually unanchored episodes)

Korolija & Linell(1996)は主に多人数が参加する場面(5、6人のホームパーティ)や制度的な場面(法廷)の会話を分析対象としている。これらの会話の参加者が2者間の実験場面の会話ではあまり見られない多種多様なリソースを利用して話題転換を行っていることが明らかになった。彼らの分類は、従来のコーディングシステムをより精緻化したもので、多人数参加の会話分析や様々な活動を取り入れた会話の分析において、従来の会話の内容間の関連性だけを基準にした分類では見落とされがちな情報を分析可能にした。

導入された話題と会話の流れとの関連性に注目した分類を概観すると、会話の媒介言語に関わらず、新出・再出・派生という三つのタイプはほぼすべての研究に見られた。また、実際に一般の人々が新たに導入された話題と先行話題・会話の間の関連性を大方認知していることも実験で明らかにされている(Planalp & Tracy 1980)。現時点では、会話参加者はどのようなリソースを利用して話題転換を行っているかを明らかにした Korolija & Linell(1996)は、最も精緻な分類の枠組みを提示していると言えよう。しかし、日本語の会話の研究では、コンテキストを取り入れた研究は見当たらず、今後の研究が待たれる。

また、上記の研究のほか、内容からの分類ではあるが、話題のフロア¹³の獲得の成敗や、複数の話題の並行等会話の内容以外の要素も取り入れる分類が見られる(小林 1993; Crow 1983)。これら

の研究には、視点の不一致等の問題が見られる。

3.1.1.2 会話の流れとの関連性に注目した分類の枠組みを指標に分析した研究

導入された話題の内容と会話の流れとの関連性に注目して分類した研究は、大きく2種類に分けられる。一つは日常会話の流れはどのようなものか、一見とりとめのない会話でも、その構造が分析できるのか、どのような単位に分析可能なのかといったことに関心を持つ研究である(南 1981; 村上・熊取谷 1995; Gardner 1987; Korolija & Linell 1996)。そして、もう一つは話題転換のタイプを分析の指標として用いて、会話参加者のコミュニケーション能力や社会言語的な要因の影響を見出す研究である(小林 1993; Brinton & Fujiki 1984; Crow 1983; Planalp & Tracy 1980)。ここでは、話題転換のタイプを指標にして分析した研究を通して明らかにされていることを簡単にまとめる。

まず、話題転換の各タイプのうち、派生型と新出型という会話の内容との関連性の両端にある二つの転換タイプをコミュニケーションスキルと関連付けるアプローチが見られた(Brinton & Fujiki 1984)。Brinton & Fujiki(1984)は実験形式で、条件が統制された大人と子供の会話を比較した結果、子供ペアは大人ペアより新出型と再出型転換の生起数が多く、大人ペアは子供ペアより派生型転換の生起数が多かった。彼らは大人の会話において、派生型転換は重要な役割を示しており、会話の流れを切らずに転換していくことは、より高度な会話方略であることと指摘している。一方で、大人でも派生型転換をよくする人とそうでない人がおり、話題転換には個人の会話のスタイルがかかわっていることも明らかになったという。

Planalp & Tracy(1980)は聞き手の認知しやすさという角度から、話題転換のタイプのコンテキスト上の明示度と話し手のコミュニケーション能力との相関を検証した。その結果、コンテキストの明示度と話し手のコミュニケーション能力に対する評価に相関が見られ、明示度の高い話題転換(派生型)は高く評価されるという。つまり、話題転換のタイプは素人にも区別でき、優劣をつけられるのである。そこで、Planalp & Tracy(1980)はより能力の高い(more competent)話題転換の方略を教えれば、コミュニケーション能力の向上につ

ながると主張している。

しかし、Planalp & Tracy(1980)の主張に対して、Crow(1983)は転換のタイプとコミュニケーション能力は直結するものではないと異議を唱える。同じく量的な分析を行った Crow(1983)は、会話能力の高い話し手でも思うがままに会話をすれば、「一貫性のない」(コンテキストと関連しない新出型)話題転換が頻出することもあり、転換のタイプの生起は会話参加者の親密さともかかわると指摘した。

Planalp & Tracy(1980)がコミュニケーション能力とはなにかを定義せずに、聞き手の印象と同次元で論じるのは問題ではあるが、量的研究が少ないなか、話題転換のタイプによる聞き手への印象を実証的に検証した試みは大いに示唆を与えるものである。一方で、Crow(1983)のような会話参加者のやり取りにも関心を示す研究によって、話題転換のタイプの生起傾向には、会話参加者の人間関係等さまざまな要因が関わっており、話題の内容のみの分析の限界を示唆された¹⁴。

以上で述べたように、導入された話題の内容と会話の流れとの関連性という視点から話題転換のタイプを分類し、それを分析の指標として援用して得られた知見を見てきた。大人と子ども間において、各話題転換のタイプの生起頻度を会話ストラテジーの能力差で説明できるが、大人の場合、かなり個人的な会話のスタイル等が関わっているため、話題転換のタイプはコミュニケーション能力などを測る指標と考えるのは短絡的である。とはいえ、聞き手に与える印象を見る手段の一つとして、話題転換のタイプの分類の枠組みは援用できよう。

3.1.2 会話参加者の相互行為の特徴に注目した分類

3.1.2.1 分類の枠組み

話題転換が成功したかどうかは、その相手の次の発話を見て初めて分かるもの(Crow 1983)であり、会話の参加者間のやり取りを取り入れた分析も必要と思われる。本節では、参加者の相互行為に焦点を当て、話題が複数の会話参加者により協働的(collaborative)に転換されたかどうかを基準に分類した研究を概観する。この観点からの分類は基本的に協働的転換と、一方的転換の2タイプである。以下は相互行為的視点から分類した研究の中でも、先駆的存在の West & Garcia(1988)の定

義を示す。

1. 協働的転換 複数の参加者が相互境界付け活動をした後に転換が行われるもの
 2. 断絶的転換 二つ以上の1秒以上の沈黙または二つ以上の最小限応答の後に転換が行われるもの
 3. 一方的転換 上記境界付け活動や、沈黙や最小限応答などがないまま転換が行われるもの
- 「相互境界付け活動」とは、前出の会話例1で見られた参加者たちが「笑い」「相づち」「評価」等で話題を収束に導く行動である。日本語の会話を分析した研究で、前出の村上・熊取谷(1995)は相互作用という側面から分類している。その結果、「継続型」「断絶型」「割り込み型」、という三つのタイプが見られたと報告しているが、この分類は West & Garcia(1988)の上記3タイプと類似している。ただし、West & Garcia(1988)は2者間会話を分析資料としているため、「一方的転換」は会話の参加者の片方が話題を転換した場合をさす。一方の村上・熊取谷(1995)は3者間の会話を分析しているため、割り込みは二人がある話題について話している最中に第3の会話参加者が突然話題を変える場合を指すので、両者は同じものではない。村上・熊取谷(1995)は現在の話題の参加者が突然話題転換を行うことについて言及していない。会話参加者の相互行為の特徴に注目し、さらに話題導入者の導入前の行動をより細かく分析したのは Ainsworth-Vaughn(1992)である。分類は、West & Garcia(1988)を参考にした「相互的(reciprocal)転換」と「一方的(unilateral)転換」の2タイプである。一方的転換は、相手の反応を待たない転換で、相手と協働で話題を収束させるプロセスが見えないという点では共通しているものの、相手の発話に関連することを話そうという会話の相手への関心の有無に差がある。そこで、彼女はこの相手への関心度は導入直前の発話交換における結束性の有無で図れると考え、一方的転換を1.関連のある転換(Links、前の話題に関するまとめの発話をする)、2.最小限の関連のある転換(Minimal links、相づちをうつ)、3.突然の転換(Sudden topic changes、前の話題を終わらせる発話を全くしない)という三つの下位タイプに分類した。

表2 相互行為の特徴から分類を行った主な研究

	West & Garcia(1988)	Ainsworth-Vaughn(1992)	Okamoto & Smith-Lovin(2001)
研究の目的	男女間の会話において、話題転換はどのようにされているのか	話題転換のタイプを用いて医療現場の会話における力関係や性差の影響を検証する	① 男性は女性が話している最中に話題転換をするか ② 話題転換に男女差があるか ③ ジェンダー以外で話題転換に影響する要素があるか
データ	男女のペア	医師(男女)―患者(女性)	男女6人が参加するタスクつき討論場面
分類の根拠及び分類	やり取りの特徴からの分類 1.協働的転換 2.断絶的転換 3.一方的転換	West & Garcia(1988)を大枠にし、独自に下位分類を行った 1.相互的転換 2.一方的転換 ①関連のある転換、 ②最小限の関連のある転換 ③突然の転換	Ainsworth-Vaughn(1992)の分類を採用
結果	一方的転換はすべて男性からのもので、男女間の話題転換に非対称性があった。	医療場面での会話において男性医師がより支配的である。	①男女差が見られなかった。 ②タスク達成に有能と目されるかどうかによって異なる、これは討論のやり取りで決められるもので事前に決まったものではない。

Ainsworth-Vaughn(1992)は、West & Garcia(1988)の分類の精緻化を図ったが、沈黙については触れなかった。これは Ainsworth-Vaughn(1992)が分析に用いる会話データの種類と関係すると思われる。West & Garcia(1988)の分析対象は初対面でお互いを知るための会話であり、会話を通して人間関係を構築することが目的である。沈黙を解消するために話題転換を行われたという特徴が見られた。また、同じく初対面の会話を扱った Maynard(1980)にも同様の指摘が見られた。一方、Ainsworth-Vaughn(1992)は医師と患者の診察中の会話をデータに用いている。診察中に医師が考えたり、所見を書いたりするために沈黙がおきると推測されるが、それは必ずしも気まずいものではないと思われる。このようなデータでは、沈黙と話題転換のかかわりが薄いと推測される。話題転換の分類の枠組みには会話の場面や目的による影響が窺われた。表2では相互行為の特徴から分類を行った主な研究をまとめた。

3.1.2.2 相互行為に注目した分類の枠組みを指標に分析した研究

話題転換のタイプを会話の参加者間のやり取りの特徴から分類した上記の研究の着眼点は主に会話における非対称性にある。

初対面の会話を分析した West & Garcia(1988)は上記三つのタイプを集計した結果、一方的転換は全て男性による転換であることが分かった。大多数の話題転換は会話参加者の協働的な相互行為¹⁵⁾により行われるが、男性には女性の話している最中や、話題展開中に一方的に話題を転換する傾向が見られた。

医師と患者の会話を分析した Ainsworth-Vaughn(1992)は男女の医師の話題転換のタイプを比べた結果、「相互的転換」の占める割合が大きく違っていったことが分かった。女性患者は男性医師との会話においては、話が打ち切られることをより多く体験している可能性が窺われた。そこで、Ainsworth-Vaughn は、参加者間の相互行為の特徴から話題転換のタイプの分析により、男性医師の家父長主義や会話の支配的位置、患者の受身的な役割という会話参加者間の力と自主性の構造を浮き彫りにすることができるかと強く主張した。

以上二つの研究はともに話題転換の分析を通して、会話の相互行為における男女差を見出したが、同じ分析指標を使って、性差の影響が見られなかった研究もある。Okamoto & Smith-Lovin(2001)は Ainsworth-Vaughn(1992)の分類の枠組みを使って、22組の初対面男女6人のタスク付きグループ討論場面の会話を分析した結果、男女による「協働的転換

換」と「一方的転換」の割合はほぼ同率である。この討論の場では、話題転換の分析を通して性差による会話参加への影響は見られなかったという結論に達した。タスクつきグループ討論では、話題転換は討論活動における相互行為のやり取りのプロセスに影響を受ける。やり取りを通して、そのタスクにより有能であろうと目される参加者が話題転換により積極的に関与している。つまり、「参加者の性別」という固定した要素よりも、会話参加者の相互行為の様相というダイナミックなものがより大きく関わっている。また、話題転換は協働的に行われるという特徴から、弱い立場にいる参加者も関心のある話題を十分に話し合ってもらえるという。

以上三つの研究は共通して、話題転換のタイプの分析を通して、会話参加者の会話参加や、会話における支配にどのような要因が影響しているかを明らかにしている。West & Garcia(1988)と Ainsworth-Vaughn(1992)は共通して、会話における男女の非対称的な参加を、男女の話題転換のタイプの分析を通して見出した。しかし、Okamoto & Smith-Lovin(2001)では、男女の性差要因よりも、話題に対する話し手の知識、能力がより重要であった。また、同じ初対面の男女大学生の会話でも、お互いを知り合うことを目的とする会話(West & Garcia 1988)では、「協働的転換」が7割強を占めるが、タスクつき討論場面(Okamoto & Smith-Lovin 2001)では、「協働的転換」の占める割合が比較的低い。どの話題転換のタイプが多く見られるかは、参加者の数(2者間会話とグループ討論)、会話の目的・形態(人間関係の構築のための会話・討論の結果をグループ間で競争する活動)にも強く影響されるということが示唆された。

しかし、これらの相互行為の特徴から分類を行った研究では、導入された話題が会話の流れとどのようなつながりを持つか等については触れていない。導入された話題と会話の流れとの関連性を全く考慮しないで上記のような結論を出す妥当性に疑問を感じる。「一方的転換」に分類される話題の中に、先行話題と緊密なつながりを持つものもそうでないものもあろうが、それらを同じく「一方的」と位置づけてもいいのか。会話における話題転換の特徴を見極めるには、導入された話題の内容と参加者のやり取りの特徴という二つの視点のどちらが欠けても妥当性が問われる。

現時点では、英語の会話を対象とする研究では、内容と相互行為という二つの視点からの分類の枠組み及び枠組みを援用した研究が見られるが、日本語の会話を分析した研究で参加者間の相互作用に焦点を当てた研究は村上・熊取谷(1995)のみである。村上・熊取谷(1995)は隣接する話題の内容間の関連性と相互作用という二つの視点を取り入れた研究ではあるが、定義にあいまいなところがあり、分類の枠組みの精緻化が必要である。例えば、継続型と断続型の区別は沈黙とされているが、先行話題の終了プロセスにどのような違いが見られるかについてはあいまいである。また、割り込み型に関しては、3者以上の会話には、はっきりとした割り込みが見られるが、2者による会話では、どのような基準で割り込みとするかについては示されていない。本稿は、分類の枠組みを整備した上、日本語の会話におけるそれぞれのタイプの生起頻度を明らかにすることが今後の課題であると考える。

3.2 話題転換方略に関する研究

話題転換方略とは話題を転換する役目を果たす言語的、非言語的行動である。ここで言う「方略」は話し手の意図と関係なく用いられると考える。本節はまず話題転換を扱う研究でどのような話題転換方略が取り上げられているかを概観し、次に話題転換方略の使用に影響を与える要素を見て行く。なお、本稿では、話題転換方略のうちの一つの表現(行動)のみに焦点を当てる研究¹⁶をレビューの対象から除外し、会話における話題転換方略の全体像を明らかにすることを目的とした研究を対象に概観する。

3.2.1 どのような話題転換方略があるか

3.2.1.1 言語・非言語要素に注目する研究

Keenan & Schieffelin(1976)は大人と子どもの会話を観察し、話題を変える場合、メタ言語、呼びかけ、沈黙、凝視、直示、笑い、体の接近などの言語・非言語的な手段が用いられると指摘している。また、Brown & Yule(1983)は、話題を開始する際には、次の話題を紹介する表現や、音声の際立ち、上昇ピッチ、話題が終結に差しかかった際には、低いピッチ、語彙が単調になる、長いポーズ、まとめ、総括表現のくり返し等言語・パラ言語的な要素が見られると指摘し、さらに話題転換に用いられる無視されやすいものとして、話者の凝視や体の動きなどの非言語的要素や、“well, you know”のようなフィルター表現を挙げている。これらの研究は主に次の話題の開

始者の言語・非言語行動に注目したもので、概ね話題転換表現を会話の表層レベルの結束性に断絶があることを示す標識(Stubbs 1983)として捉えている。

上記のほか、Reichman(1978)は話題転換に見られる言語表現に焦点を当てる代表的な研究の一つである。Reichman(1978)は話題の単位を「コンテキスト・スペース」と捉え、各コンテキスト・スペースの境界では下記の 5 種類の転換を示すヒント(日本語訳はメイナード 1993 より)を見出した。

1. 転換を示す鍵となる表現や、指示表現(Clue Word Shifts and Deictic Expressions)
2. 転換する意図を直接表す表現(Explicitly Labelled shift)
3. 指示表現の方法の変更(Mode of Reference)
4. 言葉の繰返し(Repetition of Words)
5. 時制の転換(Tense Shift)

「転換を示す鍵となる表現」はまとめる表現を示すキーワードや導入を示す接続詞を含む。「転換する意図を直接表す表現」はメタ言語的表現を指す。「指示表現の方法の変更」は具体的に言うと、それまでの会話で代名詞(she)を使っていたが、転換個所で新たにその人物の名前(Sally)を出したりすることである。「言葉の繰返し」は横道にそれた話題を戻す役割を果たす。「時制の転換」は語りの部分を示すのに用いられる。

Reichman(1978)のほか、Crow(1983)も話題転換に用いられる言語表現に注目している。これらの研究は会話の結束性や一貫性に注目し、話題転換の方略を主に話題の導入者が聞き手の理解を助けるための手段として捉えているため、主に話題開始の部分に焦点を当てている(表3参照)。

一方、日本語の会話を対象にした研究では、話題開始の部分だけではなく、話題終了の部分に用いられる特徴も多くあげられている。メイナード(1993)は Reichman(1978)を参考に分析した結果、日本語の会話には、言語表現以外の要素も含め次の 4 種類の転換ストラテジーが見られるという。

1. 会話中の一次停止(沈黙)
 2. まとめや評価をする表現
 3. 限られた反応(相づちや繰返し、笑い、簡単な表現)
 4. テーマ転換を示唆する文副詞・接続詞等
- ここにあげられた 4 種の転換ストラテジーのうち、1~3 は主に話題を終了させるための要素で、4

は主に話題を開始するための方略と思われる。メイナード(1993)ではこれらを明示的開始・終了に分けてはいないが、日本語の会話を分析した村上・熊取谷(1995)と中井(2003)は話題転換を開始部と終了部に明示的に分けて分析している。

中井(2003)は会話における二人の参加者の役割を情報提供者と情報協力者¹⁷に分け、先行研究で話題転換の役割を果たすものとして言及されていた言語要素を 5 種類 20 項目に整理し、それぞれの話題開始部と終了部での使用率を算出した実証的な研究である。話題開始部において、情報提供者¹⁸は相手を話題に引き込むために、相互行為指標表現、情報提供の終助詞「よ」、同意・確認要求の終助詞「ね」「よね」及び「のだ文」、語尾母音の引き延ばしなどを用いる傾向があり、情報協力者は相づちなどを用いて話題に参加する姿勢を示す。また、終了部では、情報提供者と協力者は評価表現を用いて話題を終了させる際、「ね」「よね」等の終助詞を用いる傾向が見られた。そのほか、相づちや、語尾母音の引き延ばしが多く見られ、話題に対する自分の総合的な姿勢を表明し、発話のやり取りのテンポを落としていく方略が見られた。中井(2003)では幾つかの興味深い結果が見られた。たとえば、話題転換表現で常に想起されるメタ言語は初対面でもほとんど使用されていない(使用率 1%未満)ことや、相互行為指標表現¹⁹は話題の開始部ではかなり頻繁に使用されている(19.6%)ことが明らかになった。しかし、中井があげた 20 の言語要素のうち、使用率が非常に低いものもあり、これらのものに対する説明がなかった。先行研究で提示されたもののうち、話題転換を示す特徴的なものとそうでないものを明確に提示していれば、日本語会話の話題転換方略の具体像がより湧きやすいただろう。

一方、村上・熊取谷(1995)は話題が変わったことを示す言語的・非言語的行動の特徴を話題転換部における結束性表示行動として捉えている。そして、先行話題の終了部と後続話題の開始部に見られる結束性表示行動を先導と応答に分けて、それぞれにどのような言語的・非言語的行動が見られるかを示した。

表 3 は上記英語・日本語会話を対象にした研究で見られた言語的・非言語的表現及び行動をまとめたものである。

表 3 話題転換に用いられる言語・非言語要素の一覧表¹

			Keenan & Schieffelin (1976)	Reichman (1978)	Crow (1983)	メイナード (1993)	村上・熊取谷 (1995)	中井 (2003)	
終了	言語要素	相互行為的	相づち			○	○	○	
			くり返し			○		○	
		述語的部分	評価及びまとめの表現		○		○	○	○
			普通体						○
		述語以外の部分	相互行為指標表現(フィルター)						○
	接続表現						○	○	
	終助詞							○	
	非言語要素	相互行為的	笑				○		
			沈黙	○			○	○	
			動作の変化					○	
音韻面での変化							○	○	
開始	相互行為的	くり返し	○	○				○	
		呼びかけ	○		○		○		
		情報要求	○		○			○	
	述語的部分	「のだ」文						○	
		普通体						○	
		時制の変化		○					
		メタ表現		○	○	○	○	○	
	述語以外の部分	指示表現	○					○	
		指示表現の変化		○					
		相互行為指標表現(感動詞+フィルター)					○	○	
		接続表現		○		○	○	○	
		話題およびそのフレームの提示		○		○	○	○	
		終助詞						○	
	非言語要素	相互行為的	動作の変化	○				○	
			音韻面での変化					○	○
笑			○						

3.2.1.2 相互行為に注目する研究

表 3 で示したように、日本語の研究では、終了と開始の双方における言語・非言語要素に注目しているが、英語の会話を対象にした研究では、開始方略により注目している印象を与える。それは、英語の研究では、終了の方略を言語的要素として言及するよりも、会話の参加者のやり取りの中にどのように現れているかという相互行為に注目して、取り上

げる傾向があるからである。つまり、会話の参加者のやり取りのプロセスの解明に重みが置かれている。

まず、話題の終了については、話題の導入に先立ち、先行話題の終了確認という前提が必要だという捉え方がある。その手続きの解明に取り組んだのは Goodenough & Weiner(1978) と Covelli & Murray(1980)である。Goodenough & Weiner(1978)は“Passing Moves”の働きを検証した。“Passing

Moves”とはターンの譲りあいである。すなわち、2人の参加者が一回ずつ相づちなどを打ってターンを相手に譲る行為である。彼らは、参加者のうちの一人がターンを譲るよりも、双方が譲り合うほうが、話題が終わったと判断されるという実験結果から、“Passing Moves”は有効な終了方略であると主張した。

Covelli & Murray(1980)は話題転換がどのように実現されるかを1.人々はどのように「話題はもう終わった」と認識するか、2.どのような方略で次の話題を出すか、に分けて提示した。先行話題の終了時点はどう見分けるのかは普遍的な問題であり、話題の終了は次の話題が確立された後に初めて分かるものであるため、その判断が難しく誤解を伴うものである。にもかかわらず、スムーズな話題転換が行われるのは、人々は「もう十分だ」というシグナルを出しているからだ(Covelli & Murray 1980)。彼らはこのシグナル、すなわち終了方略を1.先行話題の要約、2.相づちを伴う総括的評価、3.必要最小限の応答という三つのタイプにまとめた。1と2はスムーズな終了手順で、お互いもう十分話したと理解しあうのは難しくないが、3は非明示的で、相手が必ずしも察してくれない上、時には無理やり話題を切ろうとしているという印象を与えるという。必要最小限の応答はGoodenough & Weiner(1978)の“Passing Moves”に通じるものであり、この二つの研究は共通して、相づちが有効な話題終了方略として機能するには参加者同士が相互に行うという前提に立つと指摘している。

日本語の研究でも佐々木(2003)は日本語母語話者の初対面会話の話題転換において、相づちに関して、次の二つのやり取りのパターンを指摘した。1.A 相づち→B 相づち→A 話題転換、2.B 実質発話+相づち→A 話題転換。この二つのパターンはともに相手の相づちという終了のサインを見届けてから話題を転換するという特徴を持ち、Goodenough & Weiner(1978)らの研究結果と通じるところがある。英語と日本語の会話において、話題終了における相づちのやり取りには極めて類似する特徴が見られた。

一方、話題開始について、前出の Covelli & Murray(1980)は、1.一方が複数の話題の選択肢を与え、もう一方がそこから一つを話題にする、2.新しい話題を導入する(あまり関連がないものも含む)、3.「ついでに」という形で出された情報から話題化

する、という三つの方略を提示したが、詳しい説明や対応する会話例はない。

Maynard & Zimmerman(1984)は「話の参加者が話題を導入するのにどのような方略を使用するか」を開始発話の内容とやり取りのプロセスに注目して、知人同士7組と初対面同士15組の2者間会話における話題導入の具体的な手続きを分析した。知人ペアの場合、話題が適切かどうかはお互い分かっているので、話題導入発話ですぐ話題化できるのに対し、初対面では、「質問—応答」という話題成立までの先行連鎖が見られる。まず質問で相手に誘いかけ、相手の反応次第で話題化するまたは次の話題を探す。Maynard & Zimmerman(1984)の発話例より筆者が下記5つの先行連鎖のパターンをまとめた。

- 1.A 誘いかけ(質問)⇒B 長い応答(話題成立)
- 2.A 誘いかけ(質問)⇒B 最小限応答⇒A 話題化する⇒B 反応(話題成立)
- 3.A 誘いかけ(質問)⇒B 最小限応答⇒A 話題化する⇒B 無反応(沈黙)⇒A 異なる話題を探す
- 4.A 誘いかけ(質問)⇒B 最小限応答+質問(話題化の拒否+異なる話題を探す)
- 5.A 誘いかけ(質問)⇒B 応答⇒A 反応を遅らせる(短いポーズ、くり返し)(話題化の拒否)⇒A 異なる話題を探す

初対面の会話において、上記のような様々な話題導入のプロセスが見られた。しかし、同じ初対面の2者間会話でも、佐々木(2003)では、質問ではなく、「事実・意見」という形で話題を導入する傾向が見られ、日本語母語話者と英語母語話者の会話では異なる傾向も見られた。

以上、話題の終了と開始を会話参加者のやり取りのプロセスに焦点を当てた研究を見てきた。英語と日本語の研究を比較してみると、英語の会話を対象にした研究で、話題導入者の話題転換方略の言語・非言語要素に関する研究では、話題終了方略よりも開始方略に重点がおかれているように見えるが、実際は、話題終了に関しては、話題導入者だけではなく、参加者のやり取りを分析してそのプロセスを明らかにする研究が多く見られた。一方、日本語の会話では、話題の終了方略も開始方略も話題導入者の行動をやり取りから切り離して分析するものが多い。村上・熊取谷(1995)は参加者のやり取りを視野に入れて、「先導」と「応答」に分けて示したが、実際の話題終了のプロセスはより複雑であるため、

「先導一応答」に二分して分析することの意義が問われる。日本語の会話を対象とした研究において、今後は個々の話題転換方略の使用頻度のほか、会話参加者間の相互行為をより精緻に分析し、そのプロセスを明らかにする研究が待たれる。

3.2.2 話題転換方略の使用に影響を与えるもの

3.2.2.1 話題転換のタイプによる影響

一般に、導入される話題と先行話題との関連性の度合いにより、導入するための方略も異なるだろうという推測はたつが、実際にどのタイプの導入話題にどのような方略が多く用いられるかについては、言及した研究は少ない。

3.1 では、村上・熊取谷(1995)の話題転換のタイプの二つの視点(内容上の関連性と相互行為の特徴)からの分類を紹介した。村上・熊取谷(1995)は各タイプの転換における結束性の強弱が異なるため、そこに見られる結束性表示行動の特徴も異なると指摘した。具体的には、結束性が弱い転換には「明確な終結部がある」「沈黙が長い」「認識の変化を示すことばやメタ表現の使用」などの特徴を持ち、結束性の強い転換には「明確な終結部がない」「話題の前後関係を示す談話標識の使用」などの特徴を持つという。しかし、村上・熊取谷が提示した各話題転換のタイプの結束性の強弱の順位²⁰についての根拠があいまいであり、さらに各タイプにそれぞれの結束性表示行動の生起率などの量的集計もないため、上記の特徴について、会話例を用いて検証する必要があると考えられる。また、Crow(1983)も各話題転換のタイプによく用いられる方略に言及しているが、メタ言語の具体的な表現の違いの指摘にとどまっている。

3.2.2.2 会話参加者の関係及び会話の場面による影響

まず、会話参加者の人間関係が話題導入のやり取りに影響しているとの指摘が見られる(Maynard & Zimmerman 1984)。知人ペアの場合、話題が適切かどうかはお互い分かっているため、話題導入発話ですぐ話題化できる²¹が、初対面では、自己開示やお互いの共通点を探すことで、親密度や友好関係を構築していくのであり、話題を成立させるための「質問一応答」の先行連鎖は、会話上、文化上要求される形式であると Maynard & Zimmerman(1984)は分析している。

次に、会話の参加者間に明らかな上下関係が存在する場合や、会話における参加者の役割が明らかに

異なる場合、それぞれの参加者の話題転換方略の使用が異なることも指摘されている(Jones 2004)。Jones(2004)は食事中の会話や、家族間の会話、教師の会議、テレビの討論番組といった異なる会話の場面における話題転換方略を比較し、会話参加者の立場と会話の場面という二つの要素が話題転換方略の使用にどのような影響を与えるかを分析している。Jones(2004)の分析結果を表4にまとめる。

まず、同じ会話において、会話参加者のステータスと役割が異なれば、話題転換方略も異なる。教師の会議では、司会役の教師はためらい表現(例:あろう)で話題を開始するが、場合により、割り込むこともある。一方、アシスタントの教師が行う話題転換では話題提起の理由(急に思い出した事の緊急性)、提起された話題と会話全体の関連性を示し、司会役教師のメンツを損なわないようにためらい表現、ポーズ、フィラー、自己修正など複数の方略を用いている。一方のテレビ討論では、司会以外の参加者は、話題を転換する際、あらかじめ司会の了承を得る方略を用いている。つまり、ステータスの低い話し手または話題をコントロールする地位に立っていない話し手は、許可を求める表現や、ためらい表現、理由の説明、関連性をアピールする、急に思い出したように振舞うなど自分の「越権」行為を緩和させる方略を用いる。

次に異なる会話の場面(会議と日常会話)の比較で、場面のフォーマル性、会話の明確な目的の有無といった違いが話題の開始と終了に用いられる方略に影響を与えていることが明らかになった。また、テレビ討論という場では、非日常的で、フォーマルな会話でありながら日常会話に見せたいという作り手の意図を反映して、話題転換方略も日常会話とフォーマルな会話の両方の特徴を備える。

以上、話題転換の方略の使用に影響を与える要素を見てきた。話題転換のタイプによる転換方略への影響は言語表現とやり取りの長さの両方に影響することが言われているが、具体的にどのように異なるかについては、量的・質的ともまだはつきりされていないところが多い。またこれらの問題を考える際、会話の場面や、参加者間の人間関係、会話における立場等の要素に一定の影響を受けるといった知見も考慮したうえで分析する必要があるだろう。

表4 異なるジャンルの会話における話題転換方略(Jones 2004 より、筆者作成)

ジャンル プロセス	食事中の会話や 家族間の会話 (日常会話)	教師の会議 (フォーマルな会話)	テレビ討論番組
開始	<ul style="list-style-type: none"> 明示的な導入表現が見られない 話題が派生的に転換される 	<ul style="list-style-type: none"> 転換個所は明示的に示される 接続詞や、フィラーなど転換標識を使用 質問により話題を導入 	<ul style="list-style-type: none"> 明示的な導入表現がない 公式の決まり文句が用いられる 遠回しに導入(他者の発話引用) 普通体、「ね」で注意を呼ぶ 「やはり」で共通認識を強調 応答を求める否定形の質問「じゃないですか(でしょうか)」が多い
終了	<ul style="list-style-type: none"> 明示的に終了されない 明示的な結論表現がなく、ポーズもあつたりなかったりする 対立が起こるとき、メタ表現が用いられる(例:話をそらそう) 	<ul style="list-style-type: none"> 明示的に終了する傾向 明示的に結論づけるのではなく、数秒間の空白のあと次の話題に移る 脱線したと思われる際、まとめる表現、メタ表現が用いられる 	<ul style="list-style-type: none"> 共通認識に達したときに皆が結論を出す 討論が行き詰まっているとき、司会が結論を出さず他者のことばを引き合いに出して話題を流す

4. 話題転換の対照研究

4.1 話題転換のタイプの対照研究

異なる言語の会話における話題転換のタイプの対照研究は数が非常に少ない。また、本節で取り上げる二つの研究(山本 2003; Tryggvason 2004)はともに会話の内容的なつながりから分類した研究であり、相互行為の特徴を異なる母語場面を比較する試みは見られない。

日英のトーク番組の話題転換を取り上げた山本(2003)は、両言語の話題転換のタイプと生起頻度を調べ、その類似点に着目した研究である。山本(2003)によれば、90%以上の話題転換は①「先行表現利用タイプ」、②「連想タイプ」、③「再開タイプ」、④「新規導入タイプ」に分類でき、そのうち、①と②は連続タイプで、③と④は非連続タイプにまとめられる。この分類は内容による分類で、前出の

南(1981)や Brinton & Fujiki(1984)と非常に類似している。分類不可能で「その他」としたのは、主に撮影セット内の状況など非言語的文脈による転換または連想関係が成立するかどうか明確でないケースだということ。コンテキストとの関連性による分類を入れれば、状況に関する話題転換も分類でき、より精度の高い分類ができると思われる。分類の結果、日英とも連続タイプの転換が優勢で、中でも連想による話題転換が最も多いことが分かった(表5参照)。

山本(2003)は、トーク番組における日英の話題転換の各タイプの生起頻度を聞き手の情報処理負荷との関係から考察を試みたが、情報処理負荷の低いものが生起しやすいというように単純に比例していないという指摘にとどまっている。一方、Tryggvason(2004)は使用言語による転換タイプの生起頻度の相違に注目した研究である。Tryggvasonは

表5 日英話題転換のタイプと生起頻度(山本 2003 より、筆者作成)

タイプ	サブタイプ	日本語	英語	情報処理(聞き手の認知)の負荷
連続タイプ	先行表現利用タイプ	23%	25%	低
	連想タイプ	53%	43%	
非連続タイプ	再開タイプ	3%	6%	高
	新規導入	12%	21%	
その他		9%	5%	
計		100%	100%	

9-13 歳の子どもを持つフィンランド(以下 FinFin とする)とスウェーデン(以下 SweSwe とする)の家庭の夕食時の会話それぞれ 11 組を対象としている。話題転換のタイプは Korolija & Linell(1996)の分類を参考に、会話の場というコンテキストとの関連性を取り入れて分類している。家庭の食卓での会話は家族同士がお互いに一日のできごとなどを報告しあう時間で、いずれの会話においても話題転換が頻繁に見られる。しかし、各タイプの生起頻度に違いが見られた。現在の会話に関連性を持たない転換タイプの生起率は、FinFin が SweSwe より有意に高く、関連性を持つ話題の導入では、SweSwe が有意に高かった。この研究で Tryggvason が主張したい点は次の 2 点にあると考える。1.異なるコミュニケーションの規範が話題転換のタイプに影響している可能性がある、2.家庭の食卓で子供の会話力を育てる母親の意識の存在、このような社会文化的な要素も話題転換のタイプに反映している可能性がある。

以上日・英、スウェーデン・フィンランドの会話における話題転換のタイプの対照研究をみてきたが、ここでは、使用される言語が異なるにも関わらず、内容、コンテキストとの関連性を基準にした分類はある程度の普遍性を持つと思われる。しかし、各タイプの生起頻度は使用言語の社会文化的な要素の影響を受けることも示唆された。一方、山本(2003)と Tryggvason(2004)では、それぞれの扱う会話の場面が異なるため、両研究における各タイプの生起の頻度が大きく異なっている。山本(2003)の分析対象であるテレビトーク番組の場合、連続(派生的)転換が両言語とも 7 割を超えているが、Tryggvason(2004)では、新出型(状況的+一貫性のない)が両言語とも半分以上を占める。トーク番組と食卓での会話という会話のフォーマル度が影響していると思われる。会話の場面は話題転換の各タイプの生起頻度にも大きく影響していることが示唆された。

しかし、現時点で、会話の参加者のやり取りの特徴に焦点を当てた(相互行為の特徴からの分類を分析指標に取り入れる)研究がまだ見当たらない。言語が異なれば、その相互行為の特徴も異なる可能性があり、その視点からの研究が期待される。また、「あたりまえのことを特徴として捉えなおす」(井上 2002)きっかけを与えてくれる対照研究の役割を考えれば、さまざまな言語との対照研究は日本語の話題転換の特徴を明らかにすることにも役立つだろう。

4.2 話題転換方略の対照研究

日英の対照研究は、認知的普遍性や、情報処理負荷の共通性から、話題転換方略は言語を超えて共通した部分を明らかにした(メイナード 1993; 山本 2003)。一方、その言語の使い手が属する社会文化的要素によって転換方略が異なることも指摘されている(Yamada 1989)。

メイナード(1993)は英語の会話では、日本語の会話に見られた転換方略が英語にも同様に見られ、両者にはあまり違いがないと述べている。前出の山本(2003)は各転換タイプの生起率だけではなく、各転換タイプにおける話題転換を合図する言語表現の使用頻度も分析した。彼女は Chafe(1994)の聞き手の認知と情報処理負荷理論を援用し、各転換タイプにおける聞き手の認知的負荷の差を分析した(表 5 参照)。話題転換表現²²の使用率は情報処理負荷の高さに比例することが予想されるが、実際には英語ではほぼ予想通りの結果が見られたが、日本語では、再開と新規導入の結果が逆転している。

表 6 話題転換のタイプ別の転換表現の使用率

	先行表 現利用	連想	再開	新規導入
英語	57.93	55.47	64.21	70.73
日本語	40.20	59.75	85.71	61.11

(単位% ; 山本 2003 より、筆者作成)

また、談話標識(接続詞、間投詞、副詞)、呼称、メタ発話、説明の機能を担う疑問文という 4 種類の話題転換を合図する表現の使用数および各転換タイプにおける生起数の日英比較をした結果、まず、1. 談話標識の生起数は日英ともに圧倒的に多く、すべての転換タイプに見られた、2.メタ発話は両言語とも新規導入タイプに用いられることが最も多い、という二つの共通点が見られた。しかし、英語では比較的多く見られた呼称と説明の機能を担う疑問文は日本語ではほとんど見られない。山本はこの違いを日本語では認知的処理負荷を軽減するには通常談話標識とメタ発話に頼っていると説明し、英語と日本語では、個々の転換表現がどの程度の情報処理負荷を軽減するのかという点で異なると述べている。

認知的処理負荷という観点は、各言語の話題転換方略の共通点を説明するのに有効であるが、言語間の相違点を解釈するのは難しい。筆者は日本語の会

話では、呼称や、説明的機能を担う疑問文がほとんど見られないという英語の会話と異なる点は会話の参加者間の相互行為の異なる特徴によるもの、または両言語母語話者のコミュニケーションのスタイルの違いによるもの、というふうにも考えられると推測する。

Yamada(1989)はこのような話し手の所属する社会的文化的な影響という側面に注目した研究である。Yamada(1989)は企業内の会議というビジネス場面での会話を分析の資料として、日英²³の話題転換方略を比較した(表 7 参照)。そのうち、終了における「笑い」は日英双方とも見られたが、日英では異なる使い方をされている。英語の会話では、冗談を言って会話がうまく行ったことを示す役割を果たすが、日本語の会話では、「笑い」はお互いの非対立的な人間関係を確認する役割を果たすので、会話そのものが面白くなくてもよく見られる。同じ「笑い」でも、日英では異なる役割を果たしている。また、話題を開始する場合、双方とも談話標識を用いるが、日本語では、会話参加者間に対立のある話題にはマークせず、非対立の話題だけをマークする。一方英語では、共通知識や理解を促進するように話題間の相互関連をマークする。Yamada(1989)は双方の会話においては、情報交換というコミュニケーションの主たるニーズのほか、英語母語話者には自らのアイデンティティを維持するニーズ、日本語母語話者にはお互いの非対立的関係を維持するニーズ、というように異なるコミュニケーションのニーズが存在すると指摘している。そして、話題転換の方略の比較分析により、この違いが浮き彫りにされる(表 7 参照)。

表 7 話題転換方略の日英比較

	日本語	英語
開始方略	<ul style="list-style-type: none"> ・メタコミュニケーションマーカ ・フィラーを使用 ・談話標識を使用 ・相づち不使用 	<ul style="list-style-type: none"> ・明示的に話題を告げる ・フィラーを使用 ・談話標識 ・相づち使用
終了方略	<ul style="list-style-type: none"> ・言語的終了表現の不使用 ・笑い ・相づちの使用が少ない ・沈黙 	<ul style="list-style-type: none"> ・言語的に終了する ・笑い ・相づちの使用が多い(5割)

(Yamada 1989 より、筆者作成)

以上話題転換方略に関する対照研究を概観したが、話題転換における言語表現に注目するものと話題転換における会話参加者の相互行為に注目するものに大別される。人間の認知という視点から言語表現に注目する研究は転換方略の共通点を見出し、会話参加者の文化や、それぞれのコミュニケーションのニーズに注目した研究はその相違点を見出している。しかし、いずれの立場に立つ研究も量的には少なく、また日本語を英語と比較する研究しか見あたらないので、今後異なる言語との比較研究も期待される。

5. 接触場面における話題転換研究

本稿は日本語教育における談話教育に何らかの示唆を与えることを目指し、母語場面の研究と対照研究を概観したうえで、最後に日本語学習者と日本語母語話者が参加する会話を中心に接触場面の話題転換研究を検討する。

5.1 話題転換のタイプ

接触場面の話題転換のタイプを分類した研究は少なく、管見のところ前出の Tryggvason(2004)と楊(2004)しか見られない。日本語教育における話題転換の方向を考えるとという本稿の目的から、日本語学習者を取り上げる楊(2004)を詳しく見るが、その前に、Tryggvason(2004)を簡単に紹介したい。

4.1 で取り上げた Tryggvason(2004)は、フィンランドとスウェーデンの母語場面のほか、スウェーデンに移民したフィンランド人を母親に(平均滞在年数は 21 年)持つスウェーデン在住の家庭(以下 SweFin とする)の夕食での会話(11 組)も調査し、母語場面と比較した。分析²⁴の結果、SweFin の家庭では、使用言語はスウェーデン語であるにもかかわらず、話題転換のタイプの特徴は FinFin と類似していることが明らかになった。目下のコンテキスト(スウェーデン)と使用言語(スウェーデン語)に関わらず、移民家庭での話題転換は母親の母語のスタイルに類似している。Tryggvason(2004)は、使用言語よりも会話参加者の文化と社会化の役割のほうが大きい可能性があり、使用言語と談話スタイルとの関連性を再考する必要性を指摘した。

楊(2004)は、中国国内で日本語学習者(20 代の女子大学生、中・上級レベル)と日本語母語話者(20 代の女子・留学生)の初対面の 2 者間自由会話 14 組(28 人)を録音、録画によって収集し、話題転換のタ

タイプを内容と会話参加者の相互行為という二つの観点から分類した。話題転換の内容による分類は村上・熊取谷(1995)を採用した。相互作用による分類は「突発的」「無表示」「相手抜き」「協働的」「長い協働的」の5種類である。「協働的」と「長い協働的」は参加者双方の終了表示の見られる転換で、West & Garcia(1988)が協働的境界付け活動が見られるものとして定義している「協働的転換」に相当すると思われる。「無表示」「相手抜き」「突発的」は片方のみの終了表示が見られる、またはまったく終了表示のない転換を指し、「一方的転換」に相当すると考えられる。表8で、楊(2004)の分類の結果を示す。なお、相互行為からの分類では分かりやすくするため、5つのタイプを「協働的転換」と「一方的転換」の二つにまとめる。

表8 話題転換のタイプ(楊 2004 より)

転換のタイプ	学習者	日本語母語話者
内容からの分類		
派生型	35.5%	51.4%
新出型	59.5%	37.3%
再出型	5.0%	11.3%
相互行為からの分類		
協働的	42.0%	75.0%
一方的	58.0%	25.0%

楊(2004)では、中国語母語話者である日本語学習者と日本語母語話者の話題転換のタイプの違いを日本語能力の不足と話し手の母文化による影響という二つの側面から考察している。学習者には日本語能力の不足により、先行話題や先行発話と関連しながら、新たな話題を生成するのは困難であると考えられる。また、学習者には一方的転換が6割近く見られるという結果からは、話題転換プロセスにおける話題の終了を必ずしも必要ではないという考え方の影響の可能性があると指摘し、日本語母語話者と異なる談話スタイルを持つことを示唆するものだと楊(2004)は主張している。しかし、楊(2004)には中国語母語話者同士のデータがないため、この結果を日本語能力の不足によるものか、それとも母語の談話スタイルの影響かの断定はできない。

日本語学習者が参加する接触場面の話題転換のタイプの研究は現時点では楊(2004)しか見当たらない。楊(2004)の対象者は目標言語の学習経験がそれほど長くないことに加え、会話の場面もその母国で

あるため、母語の会話のスタイルの影響はある程度想定できると思われる。一方、Tryggvason(2004)の対象者である移民やその子どもたちが相手国に長年住んでおり、調査もその国で行ったため、使用言語の影響が大きいと思われるにもかかわらず、母語の会話のスタイルに近い結果となっている。話題転換における母語の会話のスタイルの影響が極めて大きいと言えよう。

5.2 話題転換方略

本節では、日本語学習者に焦点をあてる研究(木暮 2002; 楊 2004, 2005; Nakai 2002)と、日本語母語話者に焦点を当てる研究(佐々木 2003; Yamada 1989)に分けて、話題転換方略の研究を見ていく。

5.2.1 日本語学習者に焦点を当てる研究

Nakai(2002)、木暮(2002)、楊(2004, 2005)はともに日本語教育への提案という目的で行われた研究であり、ともに2者間会話を分析対象としているが、それぞれが対象とする学習者は異なる。木暮(2002)はJSLの学習者(初中上級各3人)を対象にしているが、Nakai(2002)と楊(2004, 2005)はJFLで、それぞれアメリカ人大学生(中級、5人)と中国人大学生(中上級14人)を対象にしている。

Nakai(2002)は接触場面の会話5組と母語場面の会話3組の録画(15分)をデータ²⁵に用い、先行研究で話題転換にかかわるとされている28項目の言語要素を分析指標としている。その範囲は、構文レベル(テ形や助詞の省略)から談話レベル(オーバーラップやくり返し)まで網羅しているが、笑いや沈黙などの非言語方略には触れていない。

Nakai(2002)は当面の話題の聞き手役(情報協力者)の話題開始部と終結部での言語表現を分析した。開始部において、1.日本語母語話者の疑問文に述部引き延ばしが見られたが、学習者の疑問文にはそれが見られなかった、2.日本語母語話者は接続表現で話題間の関係を示すが、学習者は接続表現を正しく使用できない、3.学習者の間違った終助詞の使用、という三つの問題点を指摘している。また、終了部において、日本語母語話者は相づちを「語尾母音引き伸ばし」や「中途発話」、「共同発話」など多様な転換装置と組み合わせて場面に応じて使い分けているのと対照的に、学習者は相づちのみに偏っており、そのため、母語話者に発話を理解していないまたは会話に関心を持たないといった印象を与えてしまう恐れがあると指摘している。Nakai(2002)は日本語

教育の現場では、学習者に話題転換表現を明示的に教え、練習させる必要を主張した、日本語学習者の話題転換行動に焦点を当てた数少ない貴重な研究である。しかし、英語母語場面の研究や対照研究から、相づちは英語母語話者の話題終了の典型的方略と合わせて考えれば、その母語の影響も考えられる。それを視野に入れた教育も必要なのではないかと思われる。

一方、木暮(2002)は12名の調査対象者に依頼し、親しい友人との雑談を録音(15分間)してもらい、それをデータとした。対象者の内訳は母語話者3名、学習者9名である。母語話者は大学・大学院生の20代女性で、学習者は性別・母語未統制の留学生で、初・中・上級レベル各3名ずつである。木暮(2002)は村上・熊取谷(1995)を参考に、話題転換表現を下記の6種類9形態に分類して分析を行った。

- ①認識の変化を示す表現(例「そうそう」、「そういえばさー」)
- ②接続表現：談話標識(例「んー」「え」「あのさー」)
接続詞(例「でも」「だから」「ところで」)
- ③メタ言語的発話(例「全然違うんだけどー」)
- ④話題のフレームの提示：時、場所、登場する人物
- ⑤話題そのものの提示(例「Wゼミって」)
- ⑥会話相手の名前を呼ぶ

その結果、母語話者、日本語学習者ともに転換表現を伴う話題転換の割合が比較的高い。日本語母語話者の使用傾向を見ると、過半数が②接続表現であり、③、④、⑥の使用は少なかった。一方、学習者の場合、日本語能力が上がるにつれ、使用できる転換方略の種類が増える傾向があり、認識の変化・談話標識→接続詞→メタ言語的発話という順序で広がる。しかし、上級学習者でも、話題転換表現の機能を十分に理解しておらず、使い分けができていないという問題点も見られた。

Nakai(2002)はJFLの中級レベルの学習者を対象としているため、学習者の日本語能力の不足による問題も多いと思われるが、木暮(2002)はJSLの上級学習者まで対象者を広げ、日本語学習者の話題転換研究に大きな示唆を与えている。しかし、木暮(2002)は話題の開始部分にだけ注目し、分析は話題導入部分の最初のターンでの発話だけを対象とし、話題の終了について言及していない。話題の転換は

会話参加者の相互行為により成し遂げられるので、話題切り出しの1ターンだけを分析することの妥当性が問われる。特に学習者にとって、話題を転換する際に、いかに先行話題をスムーズに終了させるかも重要な課題である。転換表現が正しいのに「突然話題が変わったような印象」(木暮2002: 20)を与えたのは先行話題が終わっていないことが考えられる。話題の開始発話だけではなく、話題の終了部も転換プロセスの中に入れて調査しない限り、問題の所在を突き止めるのは難しい。

最後に同じく村上・熊取谷(1995)を参考に分析指標を立てた楊(2005)を見る。楊(2005)の分析指標は下記の通りである。

- 話題開始方略：①呼びかけ、②言いよどみ表現²⁶、
③認識の変化を示す感動詞、④接続詞、⑤メタ表現
話題終了方略：①まとめや評価、②相づち、③くり返し、④笑い

開始方略の使用率について、学習者は言いよどみ表現の使用率は最も高く、日本語母語話者の2倍以上となっており、一方日本語母語話者は認識の変化を示す感動詞が最も高く、それも学習者の2倍以上となっている。一方、終了方略において、双方の使用率の順は同じだが、日本語母語話者の使用総数が学習者よりはるかに多かったことが分かった。楊(2005)は学習者が「言いよどみ表現」を多用することから、学習者が話題開始に難しさを感じていながら話題導入をしていると指摘している。「言いよどみ表現」は話し手がこれから話す内容またはその言語形式を考えていることを示す談話標識で、話題導入前のターン確保の役割を果たす。一方の「認識の変化を示す感動詞」は発話内容が先行発話との関連性が低い、または直接関連がないことを聞き手に示し、聞き手の注意を喚起する役割を果たす。Nakai(2002)と木暮(2002)はこの2種類をまとめて、相互作用マーカ―/談話標識としたが、実際に細かく分析すれば、異なる役割を果たしていることが分かる。日本語母語話者は聞き手の理解への配慮を重視し、「認識の変化を示す感動詞」を多用するが、学習者は目標言語の適切な表現が見つからないための時間稼ぎや、ターン確保の手段として「言いよどみ表現」を多用している。

楊(2004)はさらに導入された話題と先行話題の関連性による話題転換方略の違いを調べた。日本語母

語話者が最もよく用いる「認識の変化を示す感動詞」は新出型と再出型に多く見られ、学習者が最も多用する「ためらい表現」も同じく新出型と再出型に多く見られた。新出型と再出型は最もマークされる話題転換であることが接触場面で改めて示された。

楊(2004, 2005)は、中国語母語話者の学習者の話題終了方略の不使用が、母語話者に違和感や唐突さを抱かせる要因の一つとなっている可能性を推測している。一方、Nakai(2002)は、英語母語話者の学習者の相づちに偏る終了方略が、相手に会話に無関心という印象を与えると指摘している。しかし、楊(2004, 2005)では、学習者が相づちを繰り返す場面が見られなかった。中国語母語話者と英語母語話者の転換行動には異なる特徴が見られ、今後母語別に細かく見ていくことの必要性が示唆された。

5.2.2 日本語母語話者に焦点を当てる研究

前節では日本語学習者の話題転換方略を扱った研究を見てきたが、本節では、日本語母語話者の接触場面における話題転換方略を調査した研究(佐々木 2003; Yamada 1989)を論じる。佐々木(2003)は日本語使用の接触場面と母語場面を比較しているが、Yamada(1989)は英語使用の接触場面と日本語母語場面を比較している。

佐々木(2003)は二つの場面を相互作用管理方略²⁷という観点から初対面の自由会話各 20 組ずつを分析した。接触場面では、母語場面と異なる方略を選択する場面もあれば、母語場面で慣習化された方略を接触場面に持ち込む場合もある。例えば、「言語レベルの移行」は接触場面のみに見られる方略で、会話相手を「言語ゲスト」とみなし、話題転換をより明確に示すためのものである佐々木(2003)は解釈している。また、1 秒間以上の沈黙については、相手をストレンジャー度の高い「文化ゲスト」とみなし、緊張を回避するために行った可能性も考えられるし、また、母語話者の「言語ホスト」としての沈黙を埋める義務感からも考えられるという。これらの転換方略の調整は、接触場面における日本語母語話者の非母語話者への配慮を示すものと言えよう。

ただし、佐々木(2003)の分析は相互作用的观点から、発話機能などを中心としているため、話題転換の具体的な表現にどのような配慮が見られるかについて、明らかになっていない部分が多いので、今後異文化間と同文化間の具体的な転換表現の異同を解明する研究が期待される。

前出の Yamada(1989)は日本語母語話者が英語母語話者とのビジネス会議の場での話題転換方略を調べ、母語場面と比較している。接触場面において、話題開始では、直示、談話標識、ポーズと複数の開始方略を組み合わせて用いられる。直示は“this one”、“the other thing”のような日本的なメタコミュニケーションマーカを英訳したものである。これらの表現は会話を直線的ではなく、循環していくスタイルにする役割を果たす。また、潜在的な対立が予想される話題の導入には、談話標識と長いポーズを組み合わせて用いるという。話題終了では、長いポーズが多く見られた。参加者間の対立を回避するための長いポーズによる話題の終了要請や、対立を緩和するための笑いは母語での終了方略を接触場面に持ち込んだものである。接触場面の話題転換方略の使用には、会話の使用言語と話し手の母文化という二つの要素が影響していることが明らかになった。

以上二つの研究では、接触場面における日本語母語話者の使用言語が異なり、またそれぞれの分析データの質や分析の視点も異なり、単純に比較することはできない。しかし、ここでは、1.接触場面では、日本語母語話者は、使用言語に関わらず、母語場面と同じ方略を使っており、母語場面で培われたスキーマ、または会話スタイルによる影響が窺われる、2.接触場面では、日本語母語話者は会話の相手に合わせて、母語場面と異なる方略を使用している、という二つの共通点が見られた。では、前節で紹介した Nakai(2002)と木暮(2002)を想起してみよう。いずれの研究も学習者の方略を日本語母語話者の母語場面での方略と比べている。しかし、母語話者が実際の接触場面では転換方略を調整していること、話題転換は参加者の相互行為により行われていることとあわせて考えれば、学習者の話題転換方略との比較材料として、日本語母語話者の母語場面の転換方略だけではなく、接触場面の転換方略も分析する必要があるのではないかと思われる。

5.3 まとめ

本章は日本語学習者と日本語母語話者が参加する接触場面の話題転換研究を概観した。転換のタイプに関する論文は非常に少ない。転換の方略に関する研究では、前節で扱った研究のほか、学習者と日本語母語話者の話題転換の頻度や、転換時に用いられる言語形式を会話参加の対称性やフォーリーナートークを表す一つの指標として分析する研究も見ら

れる(van Lier & Matsuo 2000)が、話題転換そのものを分析したものではないため、本稿では詳しく触れないことにした。

日本語学習者の転換方略の研究では、言語表現に焦点を当てる研究が比較的多い。目標言語能力の不足により、母語話者と異なる話題転換方略を用いる傾向や、不適切な転換表現が指摘されている。また、言語能力が上がるにつれ、使用できる転換表現の種類が増えるという傾向も見られ、話題転換方略の使用は言語能力に影響されることが示唆された。ただし、研究の数が少ない上、各研究の対象者も少なく、量的集計の分析手法を取りながら、統計上の有意差を出すにはいたっていないものがほとんどである。一方、同じく JFL を対象としても、英語母語話者と中国語母語話者では、転換方略に異なる特徴が見られ、学習者の研究において、その母語・母文化の影響に注意を払う必要性が感じられる。接触場面の非母語話者参加者には二つの側面があり、それは、目標言語の学習者であると同時にもう一つの言語の母語話者でもあるということである。母語の影響と言語能力の影響を同時に視野に入れた研究こそが今後の進むべき方向ではないかと思われる。この点について、日本語母語話者の異なる場面(母語と接触場面)を比較した研究(佐々木 2003; Yamada 1989)で得られた知見は大いに示唆を与えるものである。日本語母語話者は母語話者または非母語話者として参加する接触場面では、いずれも母語場面の方略を接触場面に持ち込んでいることが分かった。しかし、現時点ではこの観点からの研究は日本語母語話者にしか焦点を当てていない。日本語学習者も日本語母語話者と同様に相互行為の調整をしていることが十分に考えられる。この調整の実態を明らかにし、話題転換方略の教育に応用することも可能であろう。そのためにも、複数の要素が複雑に絡んでいる接触場面の研究を、量的な研究に加え、一つ一つの会話を質的に緻密に分析していくことが不可欠である。

6. 終わりに

本稿は転換のタイプと転換方略という二つの観点からの研究を中心に話題転換研究を概観してきた。母語場面の研究では、話題転換に見られる言語形式の解明から、会話参加者間のやり取りの特徴へと広範に渡り行われている英語による会話の研究と比べ、

日本語による会話の研究はまだ少ない。とりわけ参加者間のやり取りに焦点を当てた研究が少ない。話題転換の方略は早くから会話ストラテジーの一つ(畠 1988)としてあげられていながらも、具体的な研究があまりなされていない背景には、日本語母語場面でのやり取りの実態を明らかにする基礎研究の不足が指摘できよう。近年ようやく日本語学習者の話題転換研究も見られるようになってきたが、これらの研究は言語表現に集中している傾向が見られた。今後学習者に焦点を与える話題転換研究には、母語場面の研究の知見を活かし、多角的な視点を取り入れた研究が必要である。そのためにも、日本語母語場面の研究の充実が必要である。具体的には、1.日本語の話題転換タイプの分類の枠組みの充実(コンテキストを取り入れた分析や、具体的なやり取りの特徴を明らかにする相互行為的視点からの分類の枠組みを確立すること)、2.日本語による会話の話題転換の一般的な傾向を明らかにする(上記二つの枠組みを用いた量的研究)ことがあげられる。

また、現段階で見られる日本語学習者を対象にした研究は、ほとんど言語形式の量的分析である。しかし、現状では、会話データを扱うため大量な分析資料を得るのが難しく、ほとんどの研究は統計手法を用いていない。今後、統計手法を取り入れる量的研究と会話場면을質的に分析する研究の双方が期待される。

さらに、話題転換行動を含む会話スタイルは個人差もさることながら、その人の母語の使われている社会文化的要素からも影響を受けることが示唆されている。現在様々な言語を母語とする学習者がおり、それらの学習者の母語での言語表現や相互行為の特徴等を含む話題転換行動を綿密に調べ、日本語母語話者の転換行動と対照分析し、それらの知見を接触場面の分析に取り入れることは日本語教育現場での会話指導にも役立つであろう。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、佐々木泰子先生、佐々貴義則先生にご指導いただき、心より感謝申し上げます。また、査読の方に貴重なコメントをいただき、同じくお茶の水女子大学大学院生の鈴木伸子さん、岩田夏穂さん、堀川有美さんから多くのご助言を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

注

1. 本稿では、方略を特定の目的を達成するための様々な言語・非言語行動と捉え、ストラテジーとほぼ同じ概念と考える。
2. 本稿の日本語訳は出自が示されていないものはすべて筆者による。
3. 電話会話の場合、電話という媒介物が会話に与えた影響が考えられる。Button & Casey(1984, 1985)の研究は境界付けられた話題転換という立場を取る代表的な研究と位置づけられているが、電話会話での話題導入のプロセスは電話特有のものを多く含み、対面会話と大きく異なるため、本稿では分析範囲外とする。
4. 大学学部の講座名である。
5. 本稿は話し手として実質発話をする場合の単位をターンとする。相づちは非実質発話で、ターンとみなさない。また、話題の区切り目はターン交替箇所と同じとは限らない。この2例はターン交替箇所では話題導入が見られたが、同じく日本語母語話者同士を対象にした佐々木(2003)によれば、日本語母語話者は話し手としてターンを保持しながら話題を転換させる傾向が見られたという。
6. 南(1981)の分類は「相互作用の側面と談話内容の側面の区分は混同されている」と村上・熊取谷(1995)は指摘している。本稿は、南(1981)は談話内容のみからの区分ではあるが、隣接する二つの話題ではなく、より多くの話題の連鎖を同じ分類に取り入れたため分かりにくくなっていると考え。また、文レベルと談話ユニットレベルの混在という問題もその分かりにくさにつながっていると指摘できよう。本稿では、南の話題の推移の分類のうち、話題転換に関する部分のみを表1に入れた。
7. 南(1981)では再出としているが、両者は基本的に同じものを指していると考え。また、本稿では、英語の文献にそれに相当する概念を再出と訳している。
8. 文句を言った後ちよっとほめるとか、会話が気まずい雰囲気になったら、話題を変えるとか。
9. 例えば、Gardner(1987)があげた車窓の景色にコメントした後に話題を戻す例は、そもそも派生の循環ではないので、Yabuuchi(2002)の説明から類推すれば、偶然的新出の循環になるのか、もしくは新たな分類が必要と考えられる。
10. 不特定は相手の既知・未知の知識・情報の両方を含む。
11. 例えば、お互いジョークをするコンテキストでは、1人のジョークが終わったら、他の人が同じようにジョークを言う。
12. 突発的なできごとは電話のベルが鳴ったとか、その場のコンテキストに関連するもので、突発的新出はコンテキストと関連しないもの。
13. Crow(1983)は相手の応答が得られない発話をフロアの獲得が失敗した「挿入話題」として分類している。しかし、本稿は話題を話し手と聞き手のやり取りで作られるものであるため、やり取りの中で相手から受け入れの応答が得られない限り、導入発話は話題を生成するための先行連鎖の一部であり、話題としては成立しないと考える。また、話題を作りあげるプロセスにおける参加者のやり取りの形は様々である。参加者全員がフロアの管理に関わる場合もあれば、語りのように話題提供者がフロアを独占する場合もある。後者の場合、語り終了に差し掛かると、話題終了を確認するためのターン交替が再び活発なことが考えられる。
14. 内容的なつながりに他の視点を入れた分類をした研究に他に小林(1993)がある。小林は多人数参加の家族の座談会を資料に分類を行い、参加者の立場(年齢、性別、家族内での位置等)と話題転換における役割との関連性を見た。その分類の視点には、内容的なつながりのほか、フロアの取得関係(例：話題の並行)や具体的な行為(例：茶菓子もてなし型)、主観的評価(例：自己固執型)等の異なる次元の要素が入っているため、分類の枠組みとして、他に援用する可能性が低い。
15. 協働的に境界付け活動を行う又は協働的な「何もしない」(沈黙、最小限応答)行為による意思表示の2種類を含む。
16. まとめや評価、笑いなどといった特定の話題転換方略一つだけを扱った研究が数多く見られる(水川 1993 Drew & Holt 1998; 他)。
17. 情報提供者と協力者は話し手と聞き手とは異なる。後者はターンごとに交代するが、前者はある話題において、その役割が固定されているという。
18. 情報提供者とは主に情報提供に関する発話機能を用いる参加者のことを指す。情報協力者とは情報提供者に協力し、情報要求、言い直し要求、言い直し、関係作り・儀礼、継続、承認、興味、共感、感情、感想、否定、終了の注目表示等を用いて話段を作り上げる参加者のことを指す(中井 2003:72)。
19. この表で取り上げた研究はすべてインフォーマルな会話(大学生の初対面、親友、家族同士)で、参加者は2-3人である。中井(2003)であげられた20の言語要素のうち、筆者が話題転換方略としての役目が薄く、しかもその使用率が極端に低い要素は入れなかった。
20. 「あの」「えっと」のようなためらい表現・フィラーである。
21. 各転換のタイプの結束性強弱について二つの不等式で表している。内容から見たタイプの場合、新出型<再生型<派生型となっていて、相互作用から見た場合、断続型<割り込み型<継続型となっているとしているが、その根拠は示されていない。
22. 例えば、共通の友人の話題や、個人的な背景、相手が知らないと思われるニュースなどを前の話題とのつながりを示しつつ話題化する方略。
23. 実際には、話題を開始する表現である。
24. アメリカ国内で収集されるデータで、対象者は白人のアメリカ人である。
25. 分類の枠組み及び詳細は4.1を参照されたい。
26. 「あのう」「えっと」などのフィラーである。楊

(2004)では「ためらい表現」としている。

27. 参加者の性別、年齢及び日本人参加者の身分についての言及がなかったが、発話例を見る限り、参加者は男女両方を含み、同性間と異性間の会話両方を含むと思われる。会話内容の指定があったか否かについての言及もなかった。
28. 佐々木(2003)は相互作用管理方略を「相互作用過程やコミュニケーションにおいて、参加者が言語、非言語のメッセージをやり取りする方法、過程を管理するためのあらゆる方略」と定義している。
29. 楊(2004)だけが日本語母語話者と学習者の転換方略の使用率に有意差が見られる指標があったと報告しているが、言語能力との相関は見られなかったという。

参考文献

- 井上優 (2002) 「言語の対照研究の役割と意義」 国立国語研究所(編)『対照研究と日本語教育』くろしお出版 3-20.
- 串田秀也 (1997) 「会話のトピックはいかにつくられていくか?」『コミュニケーションの自然誌』新曜社 173-212.
- 木暮律子 (2002) 「日本語母語話者と日本語学習者の話題転換表現の使用について」『第二言語としての日本語の習得研究』5, 5-23.
- 小林美恵子 (1993) 「座談における話題の転換」『ことば』14, 102-121.
- 佐々木由美 (2003) 「初対面の異文化間コミュニケーション場面における日本語母語話者の相互作用管理方略の解明—文化スキーマ分析的アプローチ」(未公開) お茶の水女子大学大学院 博士論文.
- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」 音声文法研究会(編)『文法と音声』くろしお出版 257-278.
- 中井陽子 (2003) 「初対面日本語会話の話題開始部/終了部において用いられる言語的要素」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』16, 71-95.
- 畠弘己 (1988) 「外国人のための日本語会話ストラテジーとその教育」『日本語学』7, 100-117.
- 水川喜文 (1993a) 「自然言語におけるトピック転換と笑い」『ソシオロゴス』17, 79-91.
- 南不二男 (1981) 「日常会話の話題の推移—松江テキストを資料として」『藤原与一先生古希記念論集「方言学論叢」I』三省堂 7-112.
- 村上恵・熊取谷哲夫 (1995) 「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』62, 101-111.
- メイナード, K. 泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版
- 山本綾 (2003) 「話題転換についての一考察—アメリカと日本のテレビのトーク番組を資料として—」『えちゅーど』33, お茶の水女子大学大学院英文学会.
- 楊虹 (2004) 「中日接触場面における話題転換」(未公開) お茶の水女子大学大学院修士論文.
- 楊虹 (2005) 「中日接触場面の話題転換—中国語母語話者に注目して—」『言語文化と日本語教育』30, 31-40.
- Adato, A. (1980) Occasionality as a constituent feature of the known-in-common character of topics, *Human Studies*, 3, 47-64.
- Ainsworth-Vaughn, N. (1992) Topic transitions in physician-patient interviews: Power, gender, and discourse change, *Language in Society*, 21, 427-445.
- Atkinson, J. & Heritage, J. (1984) Topic organization, In J. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of Social Action, Studies in Conversation Analysis*, New York: Cambridge University Press, 165-166.
- Brinton, B. & Fujiki, M. (1984) Development of topic manipulation skills in discourse, *Journal of Speech and Hearing Research*, 27, 350-358.
- Brown, G. & Yule, G. (1983) *Discourse analysis*, New York: Cambridge University Press.
- Button, G. & Casey, N. (1984) Generationg topic: the use of topic initial elicitors, In J. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of Social Action Studies in Conversation Analysis*, New York: Cambridge University Press, 167-190.
- Button, G. & Casey, N. (1985) Topic nomination and topic pursuit, *Human Studies*, 8, 3-55.
- Chafe, W. (1994) *Discourse, consciousness, and time*, Chicago, IL: The University of Chicago Press.
- Covelli, L. & Murray, S. (1989) Accomplishing topic change, *Anthropological Linguistics*, 22, 382-389.
- Crow, B. (1983) Topic shifts in couples' conversation, In R. Craig & K. Tracy (Eds.), *Conversational coherence: form, structure, and strategy*, Beverly Hills CA: Sage Publications, 136-156.
- Drew, P. & Holt, E. (1998) Figures of speech: Figurative expressions and the management of topic transition in conversation, *Language in Society*, 27, 497-522.
- Gardner, R. (1987) The identification and role of topic in spoken interaction, *Semiotica*, 65, 129-141.
- Goodenough, D. & Weiner, S. (1978) The role of conversational passing moves in the management of topical transitions, *Discourse Processes*, 1, 395-404.
- Jefferson, G. (1984) On stepwise transition from talk about a trouble to inappropriately next-positioned matters, In J. Atkinson & J. Heritage(Eds.), *Structures of social action studies in conversation analysis*, New York: Cambridge University Press, 191-222.
- Jones, K. (2004) Managing topics of conversation in Japanese, In P. Szatrowski (Ed.), *Hidden and Open Conflict in Japanese Conversational Interaction*, Tokyo: Kurosio, 29-64.
- Keenan, E. & Schieffelin, B. (1976) Topic as a discourse notion: a study of topic in the conversations of children and adults, In C. Li (Ed.), *Subject and Topic*, New York: Academic Press, 335-384.
- Korolija, N. & Linell, P. (1996) Episodes: coding and analyzing coherence in multiparty conversation *Linguistics*, 34, 799-

- Maynard, D. (1980) Placement of topic changes in conversation, *Semiotica*, 30, 263-290.
- Maynard, D. & Zimmerman, D. (1984) Topical talk, ritual and the social organization of relationships, *Social Psychology Quarterly*, 47 (4), 301-316.
- Nakai, Y. (2002) Topic shifting devices used by supporting participants in native/native and native/non-native Japanese conversations, *Japanese Language and Literature*, 36, 1-26.
- Okamoto, D. & Smith-Lovin, L. (2001) Changing the subject: gender, status, and the dynamics of topic change, *American Sociological Review*, 66, 852-873.
- Planalp, S. & Tracy, K. (1980) Not to change the topic but...: A cognitive approach to the management of conversation, In D. Nimmo (Ed.), *Communication Yearbook*, 4, 237-258.
- Reichman, R. (1978) Conversational coherency, *Cognitive Science* 2, 283-327.
- Sachs, H. (1992) Topic, In G. Jefferson (Ed.), *Lectures on Conversation*, Oxford: Blackwell, 752-763.
- Schegloff, E. & Sacks, H. (1973) Opening up closing, In International Association of Semiotic Studies (Ed.), *Semiotica*, Hague: Motuton & Co.N.C., Publishers, 289-327.
- Stech, E. (1982) The analysis of conversational topic sequence structures, *Semiotica*, 39-1/2, 75-91.
- Stubbs, M. (1983) *Discourse Analysis: The Sociolinguistic Analysis of Natural Language*, Oxford: blackwell. (南出康生・内田聖二(訳)1989『談話分析』KENKYUSHA)
- Tryggvason, M. (2004) Comparison of topic organization in Finnish, Swedish-Finnish, and Swedish family discourse, *Discourse Processes*, 37, 225-248.
- van Lier, L. & Matsuo, N. (2000) Varieties of conversational experience looking for learning opportunities, *Varieties of Conversational Experience*, 11, 265-287.
- West, C. & Garcia, A. (1988) Conversational shift work: A study of topical transitions between women and men, *Social Problems*, 35, 551-573.
- Yabuuchi, A. (2002) Topic transition in casual conversation: An association model, *Semiotica*, 138, 235-258.
- Yamada, H. (1989) American and Japanese topic management strategies in business Meeting, a doctoral dissertation, YUSHODO Dissertation Service Center.

やん ほん／お茶の水女子大学大学院在学 応用日本語論講座
yang-hong@hotmail.co.jp

A review of topic shifting research — Focusing on the types and strategies —

YANG Hong

Abstract

This paper is a review of studies about topic shifting. The aim is to summary the knowledge of prior studies of topic shifting, and finding out the future works of the topic shifting research in Japanese language education. The flow is as follows;

- 1) Introducing the studies about topic shifting in Native participants situation, by focusing on two points; topic shifting types and topic shifting strategies.
- 2) Reviewing the contrastive studies, also focusing on the two points.
- 3) Pointing out the problems of Japanese topic shifting studies and doing suggestion to Japanese language education and intercultural communications, with reference to the perspectives of Native participants situation and contrastive studies regarding the studies of contact situation by the Japanese learners and Japanese Native speakers.

【Keywords】 topic shifting types, topic shifting strategies, relevance, interaction, contact situation

(Department of Applied Japanese Linguistics, Graduate School, Ochanomizu University)